
禁忌と非日常

ジョイス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

禁忌と非日常

【Nコード】

N1665I

【作者名】

ジョイス

【あらすじ】

少女はかつて、世界を救うために強くなった、強く成り続けた。しかし世界は彼女の力に恐怖し、「禁忌の姫君」として異界の住人の魂に封じられる。この物語は世界に嫌われた少女と何代目かの宿主の、日常を非、日常に変えていく物語
ジャンル・小説情報を変更しました。

そこは真っ白な空間。なにもない。

音も

光も

生き物も

上か下か、東西南北も時間の経過もわからない。そもそもここにはそんな概念はないのだろうか。

そこにただ一つ、真っ黒な塊が蠢いている。真っ黒な霞に包まれ、何か粘着質なモノが滴り、肉が膨張し、破裂する。肉の破裂とともに骨の碎ける音と、飛沫を上げる音がするが、音はその塊が認識する前に、白い空間に霧散吸収され、届くことはない。塊が認識できるのは己が碎け、爆ぜる感触と激痛のみ。

その塊はどれぐらいその空間にいたのだろうか？百年？二百年？千年かもしれないし、もしかしたら五千年くらいたってるのかもしれない。少なくとも一年二年では無いだろう。とにかく、それなりの時間をその塊は真っ白なこの空間で過ごしていた。

昔はまだ、夢を観ることができた。霞がかって観えるそれは、己が寄生する宿主の生活だった。

寄生というより、自らを封印させられている宿主の日常を観ることができた。

かつて塊は、己がいた世界では嫌われていた。忌み嫌われていた。自らを犠牲にして世界を救い、異形の化け物までに身を落としてまで人々の、すべての種族の為に戦って、戦い続けた。しかし、人々はいつしかその力と異形の姿を畏れ、忌避するようになり、それを畏に嵌め、異世界の住人に封印した。もし封印が解けても、己の世界が壊されないように。

そのために彼らは、すべての種族は、己の種族の持てる力をすべて使い、塊を異世界の人間の魂の一部に追放してしまった。

塊は夢を見ていつもこう思っていた「どの世界の人間も醜い」と。他者を憎み、恨み嫉み、傷つけ裏切る。自分が住んでいた世界と変わらない。何も変わらない。何一つ。

だが、その夢が唐突に終わってしまった。いつもいつも見たくないと思っても、唯一の外部からの刺激で、気が狂いそうなこの空間にとつての唯一の救いだったと、今になって気づいてしまった。

心の拠り所、憎しみの対象を失い、真の絶望を味わい、本当の狂気が塊に迫ろうとしたとき、赤子の声が響き始めた。

初めは何かの間違いだと思った。この空間は自分に苦痛を与える以外にその存在理由がないはずで、終わってしまった夢ですら、強大な魔法陣によって阻まれ、観えない筈のイレギュラーなのだ。こんなにはっきりと、しかも赤子の声が聞こえるはずがない。

それでも塊はその生命力溢れる声に耳を傾けた。そしていつしか、自分に苦痛を与えていた魔法陣の一部が壊れ、強制的に爆ぜていた我が身が落ち着いているのに気づいた。

異変はそれだけに止まらなかった。

声を出せば自分の声を聞いた。

縛られていた身体がある程度動かせた。

赤子の見ているものがはつきり見えるようになった。

それからしばらく経ち、赤子は少年になった。

そして・・・・・・・・

「ねえ、お姉さんダレ？」

「・・・・・・・・私のことか？」

私は信じられなかった。なぜ私以外のモノがここに居る？それも何故私の宿主が。自らの内なる世界に入れるのは、元の世界でもか
なりの高位神官だけのはず。いや、落ち着け。そもそもお姉さんだ
と？さっきまで私は肉塊だったはず。

まったく冷静になれていない私に、少年は続けて

「・・・・・・・・もしかして、オカマさんなの？」

「・・・どうだろう、私にもわからない。何せ色々なモノを喰ったからな」

少年は頭をかき、唸ったのち信じられないことを口にした。

「でもお姉さんてさ、黒いスライムみたいところで泣いていた人じゃないの？その人にそっくりなんだけど」

「・・・気づいていたのか、私に？」

「たまにお姉さんの泣き声が聞こえてたよ。聞こえた日には必ずお姉さんの夢を見るんだ。いつも誰なのか気になってたけど、今日会えて嬉しいよ」

少年は笑いながらそう言うと、少しずつその姿が薄れていった。私は咄嗟に手を伸ばし

「うえ！？なんか消えて・・・！？」

「まっ・・・！」

私の手は空を掴んだだけだったが、遠くから「またねー！」と、叫ぶような声が聞こえた。

二

「宮守先輩、わたしと付き合ってください！」

「え？ ええ〜っと・・・」

今日は中学最後の日。つまりは卒業式で、ここは体育館と武道館の間、校舎からは見えづらい告白スポットの一つなんだが・・・

「わたし、ずっと先輩に憧れていて、今日先輩が居なくなると思ったらわたし・・・」

後半何言っているのかよくわからないが、とにかくこの子はけななしの勇気を振り絞ってここに来ているのはわかった。しかし、いきなり知らん人から「好きです！」と言われても

「ありがとう、本当に嬉しいよ。でもごめんね、今はそういうの考えてないし、学校が変わったら無理だと思うんだ」

としか言えないと思うんだよね・・・

「・・・わかりました。こちらこそ、ありがとうございます」

彼女はそれだけ言うと、後ろを向いて走り去ってしまった。何度かこういうイベントを体験したけど、どう返していいか全然わからないし、終わった後は毎回申し訳なく思う。

そんなことを思いながら呆けていると、

「まあ〜た告白ですか、ツバサちゃん。うつらやっまい〜なあ〜」
「黙れ馬鹿樹、修学旅行中にヤのつく自由業の奥さんに手え出して

殺されかけたくせに」

「一年も前のことなど覚えてないさ。それよりもツバサちゃんさ、なあんでもいつも断っちゃうのさ。あの子、二年じゃけっこ有名だぜ?」

銀髪に翠色の瞳、外人のような特徴に加え、日本女性のような線細く整った顔立ち、そして極め付きは紅くぬれたような口唇。どうか神話のお姫様ですか?と、言いたくなるような容姿を持ちながら、すべてを台無しにするような変な抑揚をつけて話すこいつは齋宮寺^{さいぐうじ}樹^{つき}。一応数少ない男の友人なんだが・・・

「・・・今はそんな気になれないんだよ」

「ふーん、まあいいけどね。アフターケアは任しときな」

こんな感じのアホなんで、たまに死ねばいいと思う。わりと真剣に。

「死んで腐れてもーいっぺん死ね」

「・・・けっこーきつついよね、ツバサちゃん。僕傷つくな」

おっと、思わず本音が出てしまった。

「ここで言い争っても仕方ないから行こうか、樹が来たってことは高梨さん待ってるんだろ?」

「そうそう、美紗カンカンに怒りながら待ってるぜ。おー想像しただけで震えるわ」

「・・・何で高梨さん怒ってるの?俺用事あるから待ってて言ったよね?」

「複雑怪奇な乙女の心なんだろうさ」

妙な抑揚を付け、肩をすくめながら樹はそう言う。俺は全くわけがわからないまま、その場所を後にした。

—今夜はまたいろいろ聞くことができたなあ、ツバサ？・・・—

「ん？どったの、ツバサちゃん？」

「なんでもない」

聞こえない筈の声を聞きながら・・・

俺らは校門前に急いだ。校門前に着くと、高めに結っている特徴的なポニーテールが揺れた。どうやらこっちに気づいたらしい。俺らが目の前に着くと

「おっそい！いつまで待たせる気よ！？」

両手を腰に当て、気の強そうな大きな目をさらに吊り上げ、凜としたよく通る声が響く。その際、歳に対して不釣り合いな二つのモノが揺れる。俺はなるべく見ないように目を逸らすと、横で馬鹿が凝視しながら

「いやゝツバサちゃんがOK出すか悩んじゃってさゝ、はじめて彼女が・・・あだっ！」

突っ込むのがめんどいので俺は馬鹿の頭を叩いて意志だけを伝える。反対側を高梨さんが殴ったようだ、それも拳で。随分うざったい視線を足元から感じるが無視、自業自得だ。それにそんなことを高梨さんに言ったら

「ホントなのツバサ!？」

高梨さんが俺の胸倉を掴みながら聞いてくる。この馬鹿は毎回嘘情報を高梨さんに教え、混乱させるので馬鹿に遠慮はしない。つか苦しいし顔が近くて焦るんですけど!?!?!つか恥ずかしい!?!校門の前でこれはやめてくれないかなあ!?!?

「ちよっ、近い近い!落ち着いてココ校門前!」

「うえ!?!ああ、ごっ、ごめん!」

なぜか高梨さんは毎回俺が告白される度にこうして迫ってくる。

何故、人生の中でも数少ない一大イベントが彼女に筒抜けなのかというと、「いや、僕はがんばる乙女の味方なのさ」という馬鹿が存在するためである。なぜかこいつは俺が告白されることを事前に把握し、高梨さんに伝えているらしい。初めのうちは親ですら判別できないくらい物理的に性格矯正プログラムを施して(樹の両親は許可をくれるどころか嬉々として参加していた。特に母親の梓さん)いたのだが、こいつが全くめげず傷が一晩で完治する為、プログラムは空中分解してしまった。つまり諦めた。

俺が忌まわしい記憶を思い出していると、高梨さんは顔を赤らめながら俺から離れた。その際、俺は改めて彼女を見た。

女子にしては高めの身長、下ろしたら足の付け根まである艶やかな黒髪、大きな瞳、整った面長の輪郭、そして歳に不釣り合いなほど大きな胸。和服などを着せたら大和撫子で通じる容姿、それが高梨美紗さんだ。性格は大和撫子ではないが。三人が初めて顔を合たわ

せた中一の自己紹介の後、樹がその胸のことをからかったら、「死になさい」の一言と共に、黒板まで回転しながら飛んでいったことがある。一部以外は細いくせに、どこからその怪力が出てくるのだろうか。

「・・・とにかく移動しましよ、話はまずそれから聞かせてね？」

「拒否権を行使す・・・」

「何か言った？まさか・・・嫌なの？」

「何も言っていないません、それよりも移動しましょう。マックでよろしいですか？」

「ええ、では行きましよ」

ダメだ逆らえない。樹みたいに一晩で完治する変態ならともかく、ほぼ一般人の俺には彼女の打撃には耐えられない。おかげで思わず敬語だよ。

「そうねー早く行こう。美紗、よろしくねー」

「わかってるわよ、さっさと行くわよ」

「ふふーん、ありがとさーん」

相変わらず復活の早い馬鹿だな・・・

普通、こいつらは人のプライバシーを無視する嫌な奴の部類に入るんだろうが、なぜか憎めない。たぶん、あれがきっかけなんだろうが・・・

「なあーに黄昏てるのさー、挨拶のし忘れでもあるの？」

馬鹿が呼びやがった。俺には回想する暇もないのかよ・・・

「んなわけないだろ。それより早く行こう、高梨さんがまた怒る」

「はいはい、んじゃ行こうか」

俺は樹と、少し先を歩いてる高梨さんを追った。

三

「ふう、無駄に疲れたな・・・」

あのあと俺らはマツクに向かい、今日あったことを根掘り葉掘り聞かれ、答える羽目になった。いつもはそんなにしゃべらない高梨さんがよくしゃべり、よくしゃべる樹が黙るという逆転現象を起こしながら。高梨さんは今日みたいなことがあると必ずと言っていいほど饒舌になる。俺に対して。

高梨さんは俺らくらいしか話し相手がいない。いつもは一人で黙々と本を読んでいる。あまり美醜がわからない俺でも彼女の顔立ちが綺麗だと思う、だからもっとほかの人にも話しかければ友達ができと思うのだが、高梨さんは頑なに俺ら以外の人間に対して拒絶反応を示す。もったいないなあ、もっとフレンドリーに人と接すれば彼氏の一人や二人、すぐにできると思うのだが。

「今のうちに着替えるか」

明日から休みなので、夜に樹の家に集まることになった。いつも週末になると夕方から樹の家に集まり、そのまま次の日の朝までみんなで駄弁るのが俺ら三人の習慣になっている。樹が毎回高梨さんの胸を触ろうとして、いつも簀巻きで逆さ吊りの刑、という恒例行事付きで。余談だが、樹の母親である梓さんは、毎週末の朝は馬鹿の簀巻きをサンドバックにしてシェイプアップを行っている。梓さん曰く、「年下の男の子をゲットするために欠かせないのよ」だ、そうだ。そこは若さを保つためではないのだろうか？

俺は制服から私服に着替え、時間まで本を読もうとマンガ本を手に取り、ベツトに腰かけると

一次はわたしと話をする番だろう、ツバサ？―

俺にしか聞こえない、慣れ親しんだ声が直接頭に響く。そして、凄まじい眠気が俺を襲う。

―待て待て、俺はこれから・・・！―
―ダメだな―

俺の訴えは無情にも聞き届けられなかった。そして・・・

俺は真っ白な空間で目を覚めました。いや、夢の中に連れて来られ

た、と言った方がいいのかもしれない。何せここには、眠らなければ入れないのだから。俺は上半身を起こし、首だけで後ろを向いた。

「さて、今日ツバサに告白したのは誰なんだ？」

目線の先には、とてつもなく美しいモノ、人が考えうるすべての美の結晶が立っていた。身長は170後半ある樹よりも高く、その身長と同じくらいの濡れたように艶やかな黒髪が、風を受けているかのように揺らめく。ここは常に無風なんだが、経験則から彼女が怒っていると髪が揺らめいているようだ。そして髪にあわせて、彼女の着てる金糸や銀糸で刺？された豪華な黒のドレスが揺れる。その姿はまるで、黒い聖女のような。そんな美人に睨まれると、かなり心臓に悪い。

「知らない。たぶん、後輩の子じゃないかな？宮守先輩って言うたし」

「本当か？」

「嘘ついてもわかるでしょ？いつも見てるんだから」

「いつもはつきりと見えるわけではないからな、気になるんだよ。それよりも、本当に・・・」

「違うってば」

俺が苦笑しながらそういうと、彼女は紅い瞳を細め、やがていつもの微笑になった。それと同時に揺らめいていた髪とドレスが落ちて着く。

「まあいい、いつもツバサは乙女心を考えない奴だからな。本当ならんだろう」

「人を馬鹿にするのはやめてくれ、それにもしOKを出そうものなら俺を強制的に眠らせるだろう？」

彼女はこちらに近づき、座ったままの俺の後ろまで来ると、俺の首に手をまわし、そのまま俺に抱きついてきた。

「当り前だろう、ツバサは私のものだ。嘗て契約しただろう？」

「七歳の子供に無理やり契約したんだろーが、そんなの無効に決まってる」

「しかし契約は契約だ、だからこそツバサは起きていても私の声が聞こえ、私は僅かながらそちらの世界に干渉できる」

彼女はそう言って抱きつく力を強め、俺の背中に高梨さんより大きなものを押し付けてくる。

「それに、そんなことを抜きにしてもツバサに彼女は早すぎる。もうすぐ素晴らしい彼女が出来るから、それまで待て」

「んなことなんでわかるんだよ？」

「ふふふ、それは秘密だ。それよりもそろそろ時間のようなぞ？」

そう言って彼女は俺の頬を舐めると、俺から離れた。

「ってオイ！アル！？」

慌てて振り返った俺が見たのは、いつもの微笑ではなく、少女のような微笑みを浮かべるアルだった。それを最後に、俺は暗闇に吞まれた。

目覚めるとそこにはいつもの天井があり、さっきまでの摩訶不思議空間ではなくなっていた。俺は意識がはっきりしてくると、ベッドサイドに置いてある時計に手を伸ばした。見てみるとアルに引き込まれてから二時間ほど経っていた。

「くぁ・・・もう出なきゃいけねえじゃねえかよ・・・」

無理矢理引き込まれたあと特有の虚脱感を無視して起き上がる。約束の時間から少し遅刻していて、このままだと高梨さんに怒られる。夕方の時点ではまだ（わけがわからないが）怒っていて、これ以上不機嫌になったら何されるかわからない。いつもなら何か食い物を買ってから行くのだが、どうやらそんな暇はなさそうだ。

俺は二人に遅れる旨をメールし、慌てて樹の家に向かった。

まったくツバサは・・・

ツバサがこの空間から去った後、アルフィミエルはため息をついた。ツバサはモテるらしい。170にわずかに届かない身長、肩ぐらいの髪、まったく筋肉の付いていない身体、そしてパツチリとした大きな瞳をはじめとする完全無欠の女顔。普段の無表情がなければもっとモテるかもしれない。・・・タカナシミサという女とわずかに似ているかもしれない、雰囲気。そんなことが頭をよぎり、私は思わず眉をしかめる。

ともかくあと四年・・・あと四年で私の封印は解ける・・・それまで悪い虫が付かないようにしなければ・・・

八年前のあの日、私は多分一目惚れしたのだろう。私は今まで喰った奴らの力を使い、ツバサを契約者にした。経年による力の増大を増し、封印が解けても宿主であるツバサが死なぬように。私という強大な力が解き放たれてしまえば、私を抑えている宿主の体を消し飛ばしてしまう。だからこそ今すぐに解ける封印を解かず、八年もかけ着々と準備してきたのだ。そしてその準備もあと四年で終わり、そうすれば私とツバサを阻むモノは無くなる。その際、ツバサに私以外の想い人など許せない。しかし・・・

少しも意識しないのか、ツバサは・・・

人が胸を押し付けてもなんの反応も示さないから、私なりに好意を示すためにも頬を舐めたのだが、たぶんツバサは気付かないだろう

う。私の別の姿を知っているツバサは、ただ私がじゃれついていたように見えたかもしれない。どんなに異形の姿を取ろうと、元は人間、それも五歳のオンナノコなのだから、少しは意識してくれないとちよつと虚しい。

封印よりも大きな問題に対して、アルフィミエルはため息をついた。

四

俺は急いで樹の家への道を引き返して来た。高梨さんが「プリン買ってきて」とメールを寄越したからだ。もう少し早くしてくれればよかったのだが、たぶんこれは経験上これで怒りを鎮めてくれるはずなので、大人しく来た道を引き返し、コンビニを目指す。

樹の家はベッドタウンになっている俺らの街の中でもかなり外側にあり、コンビニまで歩いて十五分以上かかる。めんどくさいと思いつつこれ以上怒らせないためにも買いに行くしかない。こんな時だけはあのバカの回復力が羨ましい。

「あの回復力がありゃ買いに行かないのに・・・」

しかし、買いに行かなければ殴られ、いくら回復しても痛みは受けることには変わりなく、子供とはいえ人ひとりを吹き飛ばす一撃は受けたくない、と思い直す。

そんなアホなことを考えているうちにコンビニを通り過ぎていた。まだ頭が働いていないのか、と恥ずかしさを感じつつ軽く頬を両手で叩き、気合いを入れる。

気合を入れ直した俺は、プリンといくつかのスナックとドリンク、カップラーメンを人数分買い店を出る。

「ちょっと買い過ぎたかも・・・」

勢いで買い過ぎ、思わず苦笑する。無意識にいつもの倍近く買ってしまった。

「どんだけ高梨さんにビビってるんだよ、俺・・・」

落ち込んでいた心に活を入れ、俺は急いで再び樹の家に向かった。

「・・・了解、対象を駆逐します」

目の前にいる異形のモノに対しての命令が変わった。ワタシはいつもどうり何の疑問も持たずに命令を実行しようとする。

ーがあああああああああううあ！

相手は一応人型で、頭が無く、右手が異様に肥大化している。本来、首のあるところから下腹部にかけて縦に裂けていて、大小様々なサイズの牙が不規則に生えている。

ーがふああ！！

ワタシ達が便宜的に「プレミアム」と呼んでる個体は右手を振りかぶり、私目掛けて振り下ろしてきた。ワタシは冷静にバックステップで避けながら距離をとる。そのとき、

ーがあ！

短い雄叫びと共に、ブレミユの振り下ろした右手が鞭のようにになり、ワタシに向かって伸びてくる！

それを中空から出現させた大剣で切り払い、伸びてきた右手を切断する。その際、相手目掛けて数本の大剣や太刀を再び何もないはずの空間から射出、ブレミユを地面に縫いとめる。瞬きの間の攻防の後、着地と同時に相手に大剣を振りかぶりながら接近、動けない対象に、人間の限界を超えた速度で必殺の一撃を振り下ろす！

ーぐがあっ！

ブレミユは短い悲鳴のような泣き声を上げ、縦に両断された身体がずれ、突き刺さった武器の凄まじい切れ味と相手の身体の重さにより、バラバラに刻まれながら崩れ落ちる。肉片と飛び散った体液が塵になっていき、相手の完全な沈黙を確認して、四方に張り巡らしていた結界を解除する。その後、処理班を呼ぼうと支給されている携帯を起動させたところで

ーキイ、キイイイイイイイ！

突如、甲高い女性の悲鳴のような雄たけびが辺り響き渡る。振り返ると切り落とした右手が奇形再生し、三十センチくらいの芋虫にクモの足を付けたような異形のモノになっていた。どうやら右手が本体だったようだ。

ブレミユは反転、地上の生物では有り得ない動きをしながら住宅地の方に向かう。

「くっ！」

ワタシは直ぐに結界を張れるように準備しながら、ブレミユの後を追った。

ー痛い痛い痛い痛怖い怖い逃げないと逃げないと何処へ？逃げないと！ー

ブレミュと呼ばれた個体は、かつて持っていた理性はほとんどなく、原始的な本能でとにかく苦痛を与えるあの女から逃げていた。まさかあんな少女から、これほど手痛い一撃を喰らうとは思わなかった。おかげで早く新しい宿主を見つけ、寄生しなければ消滅してしまう。それに身体の大部分を失ってしまったため、ブレミュにはほとんど時間が無かった。

このまま消えてしまうのか、そう思っていると、先ほどの数倍はある結界が周囲に構築されていく。時間の無いブレミュにとって最悪の状況に最悪が重ねられていく。

そのとき、ブレミュの視界に一人の人間が映った。方向的にはあの少女がいる筈の方角だが、わずかな理性を総動員して警鐘を鳴らしている本能を抑え、かつての同族を襲い、寄生すべく進路を変更した。

「なんだ今の感覚？アルに呼ばれたわけじゃなさそうだけど・・・」

アルに夢の世界に引き込まれるときに感じる脱力感とよく似た違和感を感じ、俺は首をかしげる。しかし、周りを見回しても変化は無く、まして眠ってしまったわけでもないので不気味さを感じる。こんなのは初めてだ。

「オイ、アル何かしたか？」

そう呼びかけてみるが反応は無い。いつも向こうから始め、向こうから交信を止めていたからかな、と考えていると

「キイイイイイイイイイ！」

突然、背後の方から甲高い悲鳴のようなものが聞こえてきた。慌てて振り返ると、何かが飛び跳ねるようにこちらに向かっていているようだ。そしてそれは真つすぐ俺目掛けて飛んできた！

「うおわ！あぶねっ！」

荷物を投げ出し、俺は無様に転げ避ける。そして慌てて立ち上がると、さっきまで俺がいた所に激突したモノを見る。それは三十センチくらいの芋虫に、無数の蜘蛛の足を付けたような見たことのないイキモノだった。よく見ると、「キイ、キイイイ！」と弱々しい

鳴き声を上げ、苦しそうによろめいていた。

好奇心から、その場から動かずにそのイキモノを観察していると

「離れて！」

ーツバサ！離れろ！ー

と、ほとんど同時に頭と耳に声が届く。俺はわずかに下がりながら声がした方に顔を向けると、屋根から屋根へ飛び移る人影が見えた。体ごとそちらを見ようとしたとき、

ーツバサ！ー

「へっ？」

先ほどの奇妙なイキモノが再び俺目掛けて飛んできた！俺は声を上げる暇もなく、そのイキモノが俺の顔に張り付いてきた。ついには滅茶苦茶生臭いしヌルヌルして気持ち悪い！何これ粘液でも出てんのかよ！好奇心猫を殺すってか！

そんな不謹慎でアホな事を考えていると、口の中に何かが入ってきた。俺は慌てて引きはがそうとするが、飛びついてきた直後の柔らかさは無く、石のように硬かった。

ー・・・・・・・・！！！！！！ー

アルが頭の中で必死に叫んでいるのを感じるが、混乱している俺は何を言っているのか分からず、もがきながら意識を失った。

「まずい、一般人に被害が出てしまった」

ブレミュが住宅地に逃げ込んだ為、念のために人払いの結界を張ったのだが、なぜか一般人が紛れ込んでいた。結果以内の人間は速やかに異形から離れ、結界の外に出るか家に帰るはずなのだが・・・ワタシは浮かんだ疑問を無視し、指示を仰ぐべく携帯を起動した。

「こちら沙耶、一般人に被害がでました。ブレミュが一般人に寄生を始めましたがどうしますか？」

「・・・、・・・」

「了解、命令を実行します」

ワタシは命令を実行すべく、先ほどの倍以上の武器を出現させ、一般人だったものに射出、一拍遅れて大剣を両手に持ち突撃する。先に放った無数の武器が命中、道路を砕き、巻きあがった砂や埃を無視してさらに突っ込む。そしてワタシは見えてきた人影目掛けて両手の大剣を振り下ろした。そのとき、

「私のツバサになんてことしてくれるんだ、ん？」

この場には相応しくない、柔らかい美声が耳に届いた。そのことに動揺しながらも、ワタシは大剣を振り下ろすが、大剣が命中する前に、突風により武器だけでなく身体ごと吹き飛ばされる。

「くあ！」

吹き飛ばされながらも中空で回転しながら着地、武器を構えて前を見据える。砂ぼこりが晴れると同時に、突風の中心部からこちらに何かが飛んできた。叩き落としてみると、それはボロボロになって崩れ始めたブレミユだった。目線を戻し、前を見るとそこには誰も居らず、突風が起きてから感じる圧迫感に、ワタシは辺りを警戒すると、急に雲行きが怪しくなってきた。ちょうどワタシの真上辺りで渦巻き、少しずつ回転の中心が下りてきて、突然雲が晴れた。雲があったところには「異形の王」がいた。

西洋的な龍の見るからに強靱な上半身に、太く逞しい八本足のライオンのような下半身、しなやかに揺れる大蛇のような尻尾、ゆるやかに羽ばたく十二枚の奇形翼、五指を備えた一对の腕に、身体に見合わない二対の強大な腕が肩から生えている。そして龍の頭に王冠のようにそびえる大小様々な十の角が生えていた。その全長は尾を抜きにして百二〜三十メートルはあり、すべて合わせれば三百はあるだろうか、強大過ぎる巨軀に闇を纏い、王は佇んでいた。ワタシはこんな異形のモノを見たことが無い。

ーグウウウウルアアアアアルウウウウ!!!

魔力を伴った雄叫びで、鼓膜どころか身体が引き裂かれそうなほどの衝撃と、一般人ならば塩の柱になってしまいそうな禍々しい魔力を受け、恐怖し、足が震えだす。「異形の王」がこちらを向いた、向いてしまった。爛爛と紅く光る五つの瞳がワタシを捉える。耳の奥で何かが打ちつける音がする。それがワタシの歯が鳴らす音だと気づく頃には、「異形の王」は完全にこちらを向きワタシを見据えていた。このときワタシは、心臓すら止まってくれと、強く心から願った。

五

ワタシを見つめる「異形の王」が何を思っているのか、ワタシは読み取ることができない。相手が人間でなくても、多少なりとも相手の感情を読み取れるもののだが、光の加減なのか、七色に輝く紅い瞳に、ワタシは恐怖すら忘れ、恍惚と見入ってた。本来ならば、すぐにでも逃げだし、本部に報告するなり何かしらのアクションを起こさねばならないのだろうが、ワタシの身体は、先ほどまでの恐怖とすべてを見透かすような幻惑的な視線に、言うことをきいてくれない。

身動き一つ取れないワタシから「異形の王」は視線を外すと、

ーグルウウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！ー

二度目の魔術的、物理的にすべてを破壊するような雄叫びを上げ、その身体が煙を吹き消すかのように消えていき、それと同時に一帯に充満していた禍々しい魔力と圧迫感が霧散した。かわりに、何か光るモノが現れ、ゆっくりと降りてくる。よく見ればそれは、髪の毛長い人影と、たぶんそれに抱かれる先ほどの一般人だった。二人はそのまま地面に降り立ち、人を抱えてる女性（髪の毛長い人物は背の高い女性だったようだ）はこちらに歩み寄ってきた。そのことに対

し、ワタシは大剣を構えるが、先ほどの恐怖が頭をよぎり、体が強張る。目の前の女性からは何も感じないとはいえ、「異形の王」がいた所から出現し、ブレミユに襲われていた一般人を抱いているのだ、無関係なわけがない。

あと一歩でワタシの間合いに入ろうかというとき、

「身構えるな、それより君に頼みたいことがあるんだが、いいかな？」

「異形の王」出現前に聞いた、柔らかな美声が辺りに再び響く。あまりにも気さくに話しかけられたため、急に緊張がほぐれたため前のめりに倒れそうになる。ただブレミユを追っていただけなのに、ここまで事態が展開、変化するとは思わなかった。

あまりの展開の速さと、急激な脱力感から、普段では考えられないが半分思考を放棄しそうになる。頭を振り、現実を見直す。

目の前には髪の長い美女、そしてそれに抱かれる一般人。一般人の方は微かに胸の起伏する動きが見れる。それにしても美醜には興味の無いワタシから見ても、人外の化け物を選定枠にいれても尚、女性は素晴らしいほど美しいと言える容姿を持っている。彼女の着ている豪奢に飾られたドレスと、少年に向けられる慈しみに満ちた瞳に、まるで御子をその腕に抱く黒い聖女のように神々しく見える。よく見れば一般人の男の子もなかなか整った顔立ちをしているので、その印象を強める。

ワタシが反応しないことを不思議に思ったのか、怪訝な表情を浮かべ、女性が口を開く。

「聞こえなかったのか？ 私は・・・」

「その子は一構成員の為、基本的に決定権は持ち合わせておりません。この場ではワタクシが貴女様の要件を伺いたいと思うのですが、よろしいでしょうか？」

「誰だ、お前は？」

「失礼、ワタクシ、加賀見といいます。この辺りの人外異形対策班の班長をしています」

「ワタクシ」のところに変なアクセントを付けた声がした方を向けば、ワタクシの上司である加賀見がいつもの営業スマイルを貼り付け立っていた。中肉中背、髪は長すぎず短すぎず、眼は大きすぎず細すぎず、すべてに置いて印象を与えないかのような男である。人間の美の基準は、中性的な、中庸的な顔を基準にしているというが、この男の顔を見るとその話が疑わしく思えてくるほどの、無印象。そう言えば、この男は絶対名前を名乗らないことを思い出した。なぜなのだろうと毎回思うのだが、どうでもいいのですぐに忘れる。

「失礼ですが、要件を伺う前に、お名前を伺ってもよろしいでしょうか？ワタクシ共としても何とお呼びすればいいのか困ってしまうので」

加賀見がそう言うと、女性が目を細め

「私はアルフィミエル・レヴィエルダ・シニスストラス。手短に用件だけ言おう、ツバサ、この者を治療施設に連れて行ってくれ」

「畏まりました。・・・B隊、C隊は後処理を、A隊は病院の手配を頼む！沙耶君は私とアルフィミエル様の相手をお願いします。一緒に来てくださいますか？」

ワタクシが頷くと、アルフィミエルは微笑を浮かべ

「すぐに私の要件を聞いてくれるのだな」

「逆らっても力の差がありますし、それにアルフィミエル様に敵意は無いと思いましたので・・・」

加賀見が迷いなくそう言い、さらに続けようとしてアルフィミエルが口をはさむ。

「そちらが私に対して色々言いたいことがあるのはわかる。しかし、今はこの子を治療施設に連れて行くのを優先させてくれ。その後そちらに付き合おう、敢えて言うが、私に敵意などは無いし、害意もない」

「・・・わかりました。ではその子をこちらへ、ワタクシ共が責任もって彼を病院に連れて行きます」

「いや、私が直接連れて行く。病院とやらはどこだ？」

「では、こちらにお越しく下さい」

どうやら話がまとまったようだ。ワタクシは二人に着いて行き、加賀見の案内した車に乗り込む。その際、ワタクシが助手席に乗り込むとしたとき、「これが車か・・・なかなか・・・」とつぶやいているのが聞こえた。加賀見もそれが聞こえたのか、アルフィミエルの方を見ながら微笑んでいた。めずらしい。

運転席に乗り込んだ加賀見が口を開いた

「このような貧相な車に乗っていただくのは、大変心苦しいのですが・・・」

「気にはしていない。それよりも早くコレを動かしてくれ」

後部座席に一般人の男の子を抱いて乗り込んだアルフィミエルは、彼から目線を外さず加賀見にそう言うと、加賀見は車を出した。彼女は病院に着くまで、胸に彼を抱きながら彼から目線を外さず、愛おしげに髪や頬を撫で続けた。

六

意識がひび割れる

魂の輪郭がぼやける

ひび割れ、輪郭の曖昧になったところから流れ出すナニカ

自分が溶けていく……いや、喰われている

何も考えられない、何も感じない、ただ消えていく……

ツバサ、お前は私が守ろう

この私はお前のモノだ

つま先から頭、髪の毛一本、私を構成するすべて

余すことなくお前のモノだよ

お前が望むなら世界すら、いや、この宇宙すら破壊して見せよう

だが、お前がいなければ意味が無い

だから・・・

おまえを・・・

「んごお？」と、間拔けな声を上げる。瞼をわずかに開いたが、今だ重い瞼と頭にある脱力感にも似た眠気に、はつきりと見えない。先ほど聞こえた懐かしさを覚える声と、誰かが優しく抱きしめてくれた感触を、無意識に起き上がって探そうとするが、体の感覚が無い。はつきりと見えない眼で首だけを動かしてあたりを見る。少し

ずつはつきりとしてくる輪郭と共に、身体感覚を取り戻し始めた。今度こそ上体を起こし、少しずつはつきりする頭で状況を理解する。

「病院……？」

思わず口から言葉が漏れる。見たこともない殺風景な部屋、再び天井を見上げ、「やっぱ見たことない・・・」と視線を戻す。寝過ぎた後のような気だるい頭を使い、なぜここにいいのか思い出そうとすると、足音が近づいてくる。そして扉が開かれ、

「げんきかあーーーーーいマあいサーーーーーンギャツ！
！！！！！！」

「お父さん、病院では静かにしないとダメです・・・よっ！」

振りかぶった右手で飛んできた人物の頭めがけて振り下ろす。大変鈍い音が響き、直後、頭を床に埋没させ、体に針金でも入れているかのような垂直に立っている不思議なオブジェができる。まるで犬が・・・

「翼ちゃん、体は大丈夫？違和感はない？先生呼びましょうか？」

いつも微笑みを浮かべている蒼姉さんアオイが、手についた汚れをハンカチで拭きながら不安そうに訪ねてくる。

俺よりわずかに高い身長（なんで俺のまわりの女は身長高い奴多いんだよ・・・）、いつも微笑みを浮かべた清純派アイドルのような顔立ち、日本人離れたスタイル、背中の中ほどの髪、樹曰く「女性らしい大きなオッパイはもちろん、いっぱい子供を産めそうな安産型のおしり！将来確実に古き良き大和撫子な良妻賢母になるねー！ー！！」らしい。確かに普段は控えめでやさしい、穏やかな性格だと思うが、こうと決めたら梃子でも動かない精神的な強さと、親父を地に叩きつける物理的な強さも併せ持ったため、俺は旦那を尻に敷く恐妻になるような気がしてならない。

「どうかしましたか？やっぱりどこか・・・」

「いや、大丈夫。翼ちゃんはいいい加減やめて、それとなんで俺はここにいるの？」

俺の質問に姉さんが答えようとすると、

「蒼、もう少し手加減してくれ、息子の治療費より病院の修理費の方が高くつきそうだよ・・・」

「お父さん、少し黙ってていただけますか？私は翼ちゃんとお話してるんですけど？」

「ヒイツ！・・・すみません」

姉さんが親父の方を振り向き、そう言うとき親父は黙ってしまった。親父の方を向いてるため表情はわからないが、声色から姉さんは少し不機嫌らしい。角刈りで強面のごっつい大男が姉さんの一声で黙る姿はなかなかシユールだ。

親父の名前は宮守翔慈。ミヤモリショウジ二メートル近い身長に筋骨隆々の身体、角刈りで厳つい顔は子供が泣き出す迫力を持っている。その容姿を見ていると、ホントに俺と蒼姉さんの父親なのか不思議に思えてくる。

姉さんが再び俺を向く頃にはいつもの微笑みを浮かべていて、先ほどの不機嫌さは感じられない。姉さんは俺の左側に回り、左手を握りながら話しかけようとする

「昨日の夜に・・・」

「おい生きてるか？いわが友よ」

「だいじょうぶ！？」

姉さんが口を開こうとしたとき、高梨さんと樹がやってきた。相変わらず樹は騒がしい。

「昨日待ってたのになぁに病院に運ばれてるのさ。子供じゃないんだから車にゃ注意しなきゃダメだって」

「・・・車に轢かれたの、俺？」

「覚えてなあいの？僕はそう聞いたけど？」

その言葉に違和感を覚え、俺は昨日の夜のことを思い出そうとするが、コンビニから出た後の記憶が欠落したかのように思い出せない。そのことを不思議に思いつつ姉さんに顔を向けると、俺の言いたいことを読み取ったのか姉さんが

「ええ、私もまだお会いしてないのですが、加賀見さんという方があなたを病院まで連れてきてくださったそうですよ。なんでも翼ちゃんが信号無視をした車よけた後意識を失ったらしく、その車の後ろを走っていた加賀見さんが連れてきてくれたそうです」

「そうなんだ・・・、覚えてないけどその・・・加賀見さん？にはお礼を言わないといけないね」

「私もそうしたかったんですけど・・・、なんでも出張から戻る途中らしく慌ただしく帰ってしまわれたため、連絡先がわからないそうなんです」

「ええ・・・、何か申し訳ないね、その加賀見さんて人に」

俺は姉さんにそう言うのと姉さんは笑みを浮かべて

「ええ、いつか必ずお礼を言いましょうね、翼ちゃん」

姉さんの幼い子供をあやすような言い方に、思わず、赤面する。

俺は照れ隠しに

「翼ちゃんはやめてよ姉さん、友達もいるんだし・・・」

「僕は気にしないよ。てゆーかさつき蒼さんがそう呼んだ時は何も言わなかったのに」

その先は敢えて言わない樹めがけて親父を吹き飛ばした器具を振

るおうとするが、狭い病室では高梨さんや姉さんにも当たってしまうかもしれないと思い直し、堪える。馬鹿は俺のその様子を見て、にやにやと意地の悪い笑みを浮かべてやがる。ぜってーゆるさねえからな。

「翼、身体は何ともない？痛いところは？」

高梨さんが俺の右側にすがりつくように寄り添い、そう聞いてくる。ちよつと心配し過ぎな感じが姉さんと似ていて、思わず笑みがこぼれる。

「大じょ・・・」

「高梨さん、翼ちゃんは怪我人なんです。ちよつと近過ぎではないですか？離れましょうね？」

何か言おうとする俺を遮り、家族にしかわからない不機嫌なシグナルを出しながら高梨さんに話しかける。

「・・・翼は何も言ってない。実姉だからって心配し過ぎ」

「心配とかではなく、礼儀作法の問題です。そんなことでは翼ちゃんに嫌われてしまいますよ？ねえ、つ・ば・さちゃん？」

「えっ、いや俺は・・・」

「口うるさい女の方が翼は苦手だよ、ねえ？」

「いや、だから・・・」

俺を挟み剣呑な雰囲気を作り出す二人に、俺は救いを求め親父と馬鹿を見るが、二人は「最近蒼が冷たくてなあ・・・翼への愛情と胸ばかり大きくなって父親への愛情が育たないんだよ」 「僕も最近似たようなこと悩んで・・・」 「樹君・・・」 「おじさん・・・」 と、何か友情を深めていてこちらに見向きもしない。つーか樹、

何マジになってやがる。いつもの喋り方はどうした。

「「翼（ちゃん）、聞いてるの!？」」

どうする事も出来ない現実には、俺は天井を見上げた。

七

「昨日は酷い目にあった・・・姉さんも高梨さんも何であんなに仲が悪いんだ・・・」

翌日、俺は退院の準備をしながら思わずばやいていた。

昨日あのと二人はより白熱し、面会可能時間まで険悪な雰囲気が続け、いつの間にか樹と親父が帰ってしまったため俺一人の不機嫌な二人の相手をしなければならず、精神的にボロボロになった。あのと二人にはケガ人を労わる心は無いのだろうか？

「いや、ただ単に仲が悪いだけか・・・」

俺はそう呟きながら、あれほど俺を心配してくれる二人が優しくないわけがない、と思い直す。

そうこうしているうちに退院の用意が整う。病院から家までは結構距離があるため、昼前には親父が車で迎えに来てくれることになっている。親父が来るまで、俺はあることについて考える。それは

「なあんでアルは昨日出てこなかったんだ・・・」

昨日からアルと全く会えないことだ。いつもならあの日から毎夜、というより寝ているときは無条件で会っていたのに、なぜか昨日は会っていない。こんなことは初めてで、俺はそのことについて頭を働かせつつ、どこか喪失感を感じていた。よくウザい、とか面倒な奴だなとか思っていたんだけど・・・

「居なくなるなら前もって言っとけよ・・・寂し・・・」

「パパと会えなくて寂しかったかぁー！ーい！？マァイサんご

「ぺっ！」

「・・・下で待ってろつたろうがクソ親父ーーーー！！！！」

突然背後に出現し、飛びかかってくる変質者の御顔へ左後ろ回し蹴りを持って丁重に御持て成しをする。足へ伝わる確かな感触と鈍い音の後、変質者は一度地面にバウンドして廊下の壁にぶつかり、動かなくなる。それにしても何でこう人が考えてる時にこうも邪魔が入るのだろうか？

今の出来事で少し散らかった部屋を改めて片付け、荷物などは無いためそのまま俺は部屋を出る。廊下に意識を失って転がる親父を見て、そこで俺はあることに気付き、額に手を当て

「親父が目を覚ますまで帰れねえ・・・」

暗い昏い静まり返ったとある場所、人はおろか高位の異形のモノですら近づかない場所で、余りにも大きすぎる影が蠢き、唸りを上げる。その強大な影は右の緋色に燃える瞳と、左の氷蒼色に凍てつく瞳を見開き、首を上げ虚空を見つめる。

「封印が解けたか・・・」

かつてこの世界を救い、この世界に生きる全てのもの達に拒絶され、異世界の住人に封印されたあの「禁忌の姫君」が異世界で蘇ったことを、この身体が伝えてくる。たぶん封印が解けたことを知っているのは、この世界では自分だけだろう。もしそのことを自分以外のもの達が気付いたとしても、そのもの達は「禁忌の姫君」が封印された異世界がどの異世界なのかわからないため、どうしようもないだろうが。

「アルフィミエル様・・・」

異形の影は異色の瞳を細め、つぶやいた言葉は闇に霧散した。

「この世に光を淀め、穢すところがあつてはならない……。わかるな？」

「「ハッ」」

暗い石作りの部屋、無数のロウソクの炎が揺らめく玉座のような空間で三つの人影が佇む。一人豪華なローブを身に纏い、木だけで出来た、しかし王が座る玉座にも勝るとも劣らない意匠が凝らされた椅子に座り、残りの二人を見下ろしている。残りの二人は西洋の鎧を身に纏った男女で、膝をつき頭を垂れ、自分たちを見下ろす人物からの言葉を待つ。

「はるか東、日本で禍々しい魔力を感知した。それも最上位の来訪者級だ。これを二人に確認してもらいたい……。場合によっては・・・」

「「心得ております」」

そう言うと男女の人影が一つのロウソクの炎と共に消え、しばらくして残った人影が立ちあがり、その場から立ち去った。

「そう言えば息子に娘よ、休み明けから新たなる家族ができるぞ、喜び叫びたまえっ！・・・って、君たちテンション低・・・あぶなっ！息子よ、なぜパパの両目めがけて箸を投げつける！そして娘よ、包丁を構えるな！蒼の場合はシャレにならん！！」

「このゲス野郎！勝手に再婚なんか決めんじゃねえ！！俺らにも相談しろや！？」

「大丈夫よ、お父さん。娘息子不孝な父親には手加減しないのが最近のトレンドよ」

親父が盛り上げ、姉さんが穏やかに流し、俺が突っ込むというい

つもの夕食風景が一転、親父の再婚発言により殺伐としたものになった。

「つーか再婚はしねえっていつも豪語してたろうが!？」

「そうですよ、いつもお母さんの位牌に誓っていたことは嘘だったんですか？」

「待て待て待てっ!今ちゃんと説明するから拳構えてにじり寄るな!蒼っ!なんで日本刀持ってるの!?!怖いからそれを置け!!!」

「置け？」

「ゴメンナサイ置いてください……。お願いですから一瞬で間合い詰めて首に刀を突き付けないうでください……」

親父の脅迫、身柄の拘束（荒縄で椅子に括りつける）は姉さんに任せ、俺はテーブルの物を片付け、様々な道具を用意しながら尋問の用意をする。俺と姉さんの尋問の用意が進むのと比例して、親父の顔色が青さを増してくる。準備が整うと、俺はテーブルを挟んで親父の正面、姉さんは親父の右斜め後ろに立つ。

「さて、どーゆーことか説明しろ。しなかったら想像を絶する絶望を、もし言ったなら俺と姉さんのスペシャル拷問メドレーだ」

「待て、早まるな息子よ。それではパパは何しても死んでしまう」

「????当然のことを何故聞くんだ？」

「さも当たり前みたいに答えるなぁー!!!!!!私は君たちのパパだぞ!？」

「うるせえ、早く答えろ。早く答えないと……」

「あつっーーーーー!!!!!!」

「……そうなるぞ」

姉さんがいつもの微笑みを浮かべ、ロウソクのロウを親父の首筋

に垂らしていく。正直、姉さんのその姿が怖すぎて、思わず目をそらしてしまう。

「どうしたの、翼ちゃん？」

「なんでもないよ、姉さん……。で、どうなんだ親父？」

「うう……。ひどすぎる……」

親父が打ちひしがれてしまった。ちょっとやりすぎたか。

俺がそう思っていると

「ダメよ、翼ちゃん。こういうのは本気でやらないと」

そう言い、姉さんは先ほどの日本刀を手にとっていた。やばい、アレはマジだ。目が本気すぎる。

相手がクズとはいえ身内から殺人者を出さないために、俺が姉さんを止めようとしたとき、親父が口を開いた。

「今日急に上司からある娘さんを預かって欲しいと頼まれたんだよ、それも二人……。その子たちのことを家族と言ったんだよ……」

「なんで急にウチがそんなことしなきゃならねえんだよ？」

「私にもわからん、なんでも先方がウチを指名したんだそうだ。私も断りたかったんだがかなり大きな取引先のご令嬢たちで、もし断ったら一家が路頭に迷うことになってしまう」

「本当なんですか？」

「この状況下で嘘は言わんさ、私だって命は惜しい。とゆうよりなんで一家の大黒柱が子供たちに殺されそうにならなきゃならんのだ……」

うなだれる親父を無視し、俺と姉さんは親父が言っていることについて考える。

「なんでウチなんだ？親父の隠し子ならやっぱり親父を豚のエサにするか？」

「早まらないでください。それにしてもなぜそれほどのご令嬢がなぜ私たちのことを知ってるのでしょうか？」

姉さんが自分のことを棚に上げ、呟いたとき

「因みに娘さんは加賀見さんといって、お前を助けてくれた人の娘だぞ。新学期からはお前と同じ学校に通うらしい」

「マジ！？」

「本当ですか！？」

「ホントだ、助けてくれた加賀見さん本人は忙しくて挨拶にもこれないそうだが」

親父のその言葉に、俺は頭を抱える。

「断れるわけねえじゃん・・・」

「お礼なら世間知らずな娘たちに世間一般の生活を教えてくれ、そう頼まれてな、お前のこともあるからOKしたんだよ」

さっきまでとは逆に俺が落ち込み、親父がイキイキとしだした。

いつの間にか自らを拘束していた縄をほどき、俺の横にやってくる。

「わかったかい？今回の発端は我が不肖の息子、具体的には翼、君なのだよ」

項垂れる俺の肩に手を置き、芝居がかった口調で語りだした。

「まったく君たちはなんてことをしてくれるんだい？特に翼、今回

のことは君が原因なのによく聞きもしないで……。ママが泣いてるよ？」

「ぐう……。」

親父の物言いに俺は次第に怒りがこみ上げてくるが、自分に原因があるため親父の言葉に耐える。そんなとき姉さんが

「何か怪しいですね……。お父さんいつもなら面倒なことは断るか逃げるじゃないですか、なぜ今回その話を受けたのですか？」

「えっ？あ、いや私ももっと上の立場になりたいなー、と思って点数稼ぎを……」

「お父さん？お母さんに会いたいですかそうですかそれなら……。・。・」

「最近子供たちが冷たいのもっと優しく初々しい子供たちが欲しいと思う、OKしました！！！！」

どこからともなく取り出した縄と刀を手に迫ってくる姉さんに負け、親父が叫ぶ。そうかそーゆーことか……

「へえ、母さんに会いたいならそう言えよ、すぐに会わせてやるぜ・。・」

「ええ、私も最後の親孝行として張り切ってがんばりますのに……。・。・」

俺たちは腰を抜き、尻もちをついた親父を壁際まで追い詰める。

「いや待て、話せば……。・。・」

「「問答無用」」

その夜、宮守家の近所の方々は「いつも楽しそうでいいわね」

「うむ、なあ母さんや・・・」 「ええ、わかってます・・・」 と、
夜通し続いた悲鳴をBGMに夫婦の仲を確かめ合ったそうなの

八

まだまだ蕾の多かった桜が咲き誇り、別れの後の出会いの季節。今日は新しい衣装に身を包み心機一転、清々しい心持で臨むことを望まれる入学式なのだが・・・

―結局アルの奴、卒業式から一回も出て来ないでやんの・・・―

アルが俺の夢に出てこなくなって三週間弱、自分でも吃驚する位凹んでることに驚きつつも、何度目か知らない溜め息をつく。

俺と高梨さんは、桜舞う高校へ続く坂道を登っていた。

「翼、どうしたの？」

いつの間にか顔に出てたらしい、高梨さんにそう尋ねられる。

「なんでもないよ、高な・・・」

「なんでもなくない。卒業式、特に事故にあってからおかしい」
「うっ・・・」

顔に出ないよう気を付けていたんだが、やっぱり気づかれていたらしい。今朝は姉さんにも心配されるし・・・

高梨さんにどう答えたらいいものか考えていると、顔を伏せていた高梨さんが顔を上げ、何かを決心した瞳で俺を見つめる。緩やかな風が吹き、桜の木の枝が心地よい音を立て、薄紅の雪を降らせる。

「高梨さんはもうやめて、樹みたいに美沙って呼んで」

視界を埋め尽くす桜の色よりも、面長の美貌を赤く染め、俺にそ

う言ってくる高梨さんはとても綺麗で、思わず見とれてしまう。

「いきなり何？突然」

見とれてしまった恥ずかしさを誤魔化すため、強く言ってしまった言葉の語尾が思わず上ずる。

「いつも翼は私に対して距離がある。だから、高校からは呼び捨てがいい」

先ほどよりも赤くなった美貌で、今にも掴み掛って来そうな勢いで俺に詰め寄る。

「別にそんな・・・」

「そんなことある！ふとした時に私に敬語になるし・・・さびしいよ」

ついには俺に掴み掛ってきた。いつもなら注意をして離れるところなのだが、たぶんこの距離でなければ聞こえなかった「さびしい」の一言に、俺は何もすることもできずに立ち尽くすだけだった。

やったやっちゃったやってしまった。昨日、樹のバカと梓さんに

「このままじゃ高校入っても進展しないよ」 「そうよ」相手は奥手な翼ちゃん、あなたの好意に気付いてないことはあり得ないんだから押していかないと」 と延々言われて、いや、私自身前に進みたくて一晩中考えてた。おかげで寝不足だし、せっかく決心がついたのに何言っていいかわからなかったし、止めに限と少しの肌荒れ。せめて名字で呼ぶのをやめてもらおうと言ってみたものの、コンデイションは最悪、もっと穏やかに言おうと思ったのに結局掴み掛ってるいつもの状況に、涙が出てくる。

怖くて顔を見ることが出来ず翼の肩に顔を伏せている私の頭に、二、三度優しく撫でる温もりを感じ、顔を跳ね上げる。

翼はあまりの勢いに一瞬吃驚した表情を浮かべ、すぐに優しく微笑む。

「みんな見てるし、恥ずかしいからそろそろ行こう？ 美沙」

優しく両手で私の体を離すと、翼は顔を赤くしてはにかみながら先に行く。思わず固まっていた私は、今の言葉をようやくのみ込み、うれしくて

「うんっ!!」

自分でも吃驚する位の声で翼に答え、走り出した。

入学式も終わり、校門でみんなを待ちながら、俺は今朝のことを思い出していた。正直、高梨さんを名前で呼ばなかったのはアルの影響が強い。高な・・・美沙の俺への好意は気付いていたが、あえて考えないようにしていた。でも、アルも居なくなってしまったし、今までアルを中心に考えていたところがあつたから、この機会に他に目を向けるのもいいのかもしれない。

「まあ、ホントに好きになるかはわかんないけどな・・・」

「でも美沙目茶苦茶喜んでたぜ」。これからはガンガン攻め・・・
「つてええ!!」

「なぜおまえはいつもいつも・・・。死にたいのかそうなのかなら

死になさい」

「ちよっ、折れる折れる右手が折れるゝ!!」

突然背後から人の顔の横で喋り出す馬鹿に足払いをかけ、うつ伏せに倒し、右腕を掴み肩を踏みつけながらひねり上げる。

「私も手伝う」

「美沙! 君何言っちゃってんの!? 誰が背中を押したと思ってるの!?!」

「梓さん」

「痛っ! ちよっ! 蹴らないでゝ!?!」

あえて周りを見無視し、樹と遊んでいると美沙が

「そういえば翼、どう?」

「?」

「制服」

美沙は蹴るのをやめ、その場で一回転し、はにかみながら小首をかしげる。俺は周りの男子が息を飲むのを感じながら

「似合ってるよ、美沙」

赤を基調とした赤と黒のチェックのスカートと黒いブレザー、コルセットについた大きなリボンと、ちよっと派手だがかわいいと思う。因みに男は派手な色ってだけでデザインは意外と普通の制服だ。

「おゝ初々しい・・・フギヤ!」

馬鹿に蹴りを入れ、そのまま意識を失ってしまった馬鹿の足を美

沙と俺で持ち、引きずりながら家路に就いた。

そんな翼たちのやり取りの一部始終を見ている二人がいた。

片方は背が高く、面長の顔と細長い釣りの男で、もう一方は緩いウェーブの付いた髪を大きめのリボンでポニーにした、くりくりした目の小学生のような女の子だった。二人は翼たちと同じ制服を着ている。

「いつも元気だねーあの人たち」

「・・・んなことよりもさっさと帰るぞ犬」

話しかけられたほうはそれだけ言うと言き出す。

「待ってよートーヤー」

女の子は犬と呼ばれながらも、男の後を追った。

「加賀見さんのお嬢様方は予定より遅れて明日来るそうだ。直接学校に行くらしいから息子よ、案内は任せたぞ」

「わかったよ」

「入学式に合わせてウチに来ると聞いてたので楽しみにしてたんですけど・・・残念です」

夕食時今日の入学式の話をしているとき、加賀見さんから電話で明日娘たちをそちらに預ける、と連絡が来たのだ。

「姉さん、そんなに落ち込まないで。明日には二人に会えるんだし」

姉さんは二年生ながら副会長をやっていて、一人遅れて帰って来たのだからどうにも姉さんの纏う雰囲気暗い。少し心配になってくる。

「違うんです・・・私が落ち込んでるのは・・・・・・」

「落ち込んでるのは？」

「制服姿の翼ちゃんとお話したり一緒に下校したりお買い物したりが出来なかったのが悲しいんです！」

姉さんは一息にそこまで言うのと両手を顔に当て、マジに泣き始める。確かに朝は制服に着替える前にあいさつしただけで副会長の姉さんは先に出てったし、帰ってくる頃には俺は着替えていた。

「いやいや泣かないで姉さん、明日は一緒に帰ろうよ？ね？」
「・・・私生徒会で少し遅れますけど、いいんですか？」

顔に手を当てたまま尋ねて来る。

「加賀見さんの娘さんたちと待ってるよ、最悪二人をここに案内した後また来るし」

「本当ですか？」

僅かに顔を上げ、こちらを覗う。

「ホントホント、約束するから」

「・・・わかりました。では明日楽しみにしてますからね」

ようやく顔をちゃんと上げてくれた。これで一安心、と親父のほうを向くとすでに居なかった。どうやら逃げたらしい。この前のが効いているのだろうか？

「では翼ちゃん、洗い物よろしくお願いしますね」

「はやっ！」

半分以上残っていた姉さんの夕食が消え、上機嫌になった姉さんがリビングから出て行ってしまった。

「・・・しゃーない、やるか」

俺は溜め息をつきながら洗い物を片付け始めた。

「んあ？ここは・・・？」

真っ白な空間。見慣れていたはずなのに久しぶりに見たせいか、一瞬ここがどこかわからなかった。ここがどこだか気付いた俺はあたりを見回し、この主を探す。

「アルー！ー！！どこに居るんだあ！？アルー！ー！！！」

アルを探していると背後に気配を感じ、俺は勢いよく体ごと振り返る。そこには見たこともない少女が目をつぶって立っていた。

ショートヘアの黒髪で、両サイドの一部が胸まで伸びている。かなりの美少女。肌はなめらかで白く、まるでアルを幼くしたような

顔立ち・・・アルを幼くした？

ある考えに行きついた俺に、少女は目を開き微笑みかける。その瞳は・・・紅玉のような深紅の瞳。

「・・・――！・・・――――！！！！！！」

とっさに手を伸ばし、叫ぶが手は届かず声も声にならなかった。しかし、少女には通じたのか微笑みの表情が深くなる。いつもの夢から覚める感覚を味わいながら、俺はその姿を脳裏に焼き付けた。

「・・・ツハ！」

飛び起きた俺が見たのはいつもの自分の部屋。先ほどの光景、夢が信じられずにいると、姉さんの声が聞こえてきた。俺はいったん考えるのをやめ、身支度を始めた。

八（後書き）

九

「おっはよく翼く・・・なんかあった？暗いよ？昨日元気になった
と思っただけだ？」

「・・・ちよつとな」

「無理しないで寝てたらいい」

今日も姉さんが先に学校に向かい、一人で登校している途中、樹
と美沙が俺に声を掛けてきた。

「大丈夫だよ美沙、心配してくれてありがとう」

「・・・うん、でも無理しないで」

片手を上げ、俺が美沙にそう答えると、スルーされた樹は

「いいねく美沙幸せそうで。つか僕も心配してるのにこの扱い
の差はどうなのさく・・・」

ちよつと拗ねていた。最近冷たくしすぎていたかもしれない。俺
は偽りなき本心を伝えることにした。

「「自業自得、日ごろの行いの差」」

あ、美沙とハモった。美沙のほうを見るとちよつと嬉しそう。

「・・・バカカップルなんか、バカカップルなんか滅びればいいんだー
ーーーーー！ちつくしょーーーーー！ーーーーー！！！！」

何かに耐え切れなくなったのか、いつもの変なリズムを付けた喋

り方ではなく、至ってまともに叫びながら学校へ続く桜色の坂道を走り去ってゆく。少し不憫に思えてきたから、今度ジュースの一本でも奢ってやろう。

そんなことを考えてると、突然美沙が口を開いた

「・・・樹をいじめると、こう、私の黒い闇っばいところが喜び出すからやめられない」

あまりにも怖すぎるカミングアウトを聞かなかったことにして、美沙に移動を促し、学校へ向かった。

「樹」

「んゝ何さ・・・って、どしたの、これ？」

「何となくだ」

「ふゝん、あんがとゝ」

俺は買っておいた缶コーヒーを先に教室に着いていた樹に投げて

渡す。俺と美沙、樹の分を買ったため金のない学生には痛手だが、最近励まされてばかりだったことを考えればむしろ安いかもしれない。

「それにしても翼ちゃ〜ん」

「・・・なんだ気持ち悪い」

「ちゃんと朝は微糖のコーヒーってこと、覚えててくれたんだ〜。これはまさしく愛だよ〜」

「やめろ、中学の時そんなことばっか言ってたから、一部の女子に熱い視線向けられてたんだぞ」

軽く樹の頭を叩きながら俺はコーヒーを飲み始め、教室を見回す。

「・・・また全員同じクラスだもんな」

「どったの、しみじみしちゃって〜。昨日も会ったじゃん、それとも美沙にばっか意識向いててなあんも気付かなかったの〜？」

と言って樹は美沙のほうを見る。俺も美沙のほうを見ると、美沙はいつも通り自分の席で本を読んでいて、纏う雰囲気は周りの人を拒絶している。近くの席の人もそれを察知したのか、美沙の近くに人はいない。入学二日目でこれはある意味すごい。

「ん〜？ありゃ・・・」

「どうした？」

樹が変な声を上げる。

「いや・・・あの子、美沙に近づいてないか〜い？」

樹の指の指しているほうを向くと、小学生のような女の子が明ら

かに美沙に近づいていた。

「ありゃー・・・まずくないかい、あれ？」

「・・・すぐにあきらめるだろ」

そう言いつつ、俺たちは美沙とその子の様子を覗う。女の子は美沙に話しかけているようだが、美沙は完ぺきに無視。しかし、女の子はあきらめずに喋り続けている。

「すっげータフネスだな、あんだだけ美沙が無視してるのにまだ話してるよ。・・・もしかして美沙に女の子の友達できちゃう？」

樹の言い方こそ茶化しているが、その目は優しさに満ちていた。

「・・・そうだな」

「はいはいみんな席に着け、朝のホームルームだ」

そう言うと、タイミング良く教師が入って来た。そういえば・・・

「樹」

「ん？」

「担任の名前なんだっけ？」

「・・・鈴木誠センセ、二十六歳独身。覚えてくれた？」

何故か樹に呆れられてしまった。何か釈然としないまま、俺は樹に手を上げ自分の席に着く。

改めて教師を見ると、短髪長身にさわやかな人懐っこい笑みを浮かべ、みんなを見回している。俺の第一印象は熱血空回り教師。

「実はうちのクラスに二人の転校生が来ることになった！昨日は家

庭の事情で来れなかったが、今日からはみんなの仲間だ、仲よくしてやってくれ!・・・それでは入ってきてくれ」

その話を聞き、内心驚く。確かに加賀見さんの娘さん達と同じ学校に通うのは知っていたが、二人とも同じクラスとは何か変だ。

俺が不思議に思っていると、担任により閉められた扉が再び開かれる。そして、問題の二人が入って来た。教室が静まり返る中、二人は教壇の中央に立ち、こちらに向きなおして喋り始める。

「私は加賀見アルフィミエル、こっちは妹の沙耶だ。学園のご厚意で二人一緒のクラスにしてもらった。長い間外国で暮らしていたため、少し世間知らずなところもあると思うが、よろしく頼む」

「・・・よろしく」

—うおおおおおおお！！！！！！！

一瞬の空白の後、馬鹿（男子）の雄叫びが響く。まあ無理もないだろう。

沙耶と呼ばれた女の子は小柄で、癖のない黒髪が足元近くまで伸びている。肌は透き通るように白く、どこか儂い印象を与える。そして顔は日本人形のように整っている。まごう事なき美少女だが、特に深緑色のその瞳から目を外せない。

もう一人は女子の平均的な身長で、黒髪のショートのアサイドの一部が胸ぐらいまで伸ばしてる美少女で、その瞳の色は・・・深紅に輝いていた。

深紅に輝く瞳が俺を捕える。彼女は微笑み

「そうそう、言い忘れていたが彼、ミヤモリツバサは私のだ。手を出した奴は許さない、以上」

「ああ？ミヤモリってどいつだ？」

「あいつじゃね？」

「コロスコロスコロスコロスコロスコロス」

一拍の間を置き、教室内の温度が急降下、クラスの視線が俺に集中する。そんな中、沙耶と呼ばれた少女が臆することなく俺に近づき

ちゅっ

右の頬に物理的に柔らかい温度を感じ、同時に頭へある情報が流れ込んでくる。それは

「君は、あの時の・・・」

そう、俺が変な生き物に襲われた時の記憶。あの時一瞬見た女の子が・・・

そこまで考えが及んだ時、突然背中に柔らかいのが押しつけられる。

「何見惚れているツバサ、お前は私のだ」

「やっぱお前アル・・・んむう」

頭を無理やり左に捻られ、突然キスされる。横目には「今回だからな」という教師に、「コロスコロスコロス・・・」と呟く美沙、「いーーーーっつも思うんだよねえ、現実って理不尽だなあ、現実って・・・!？」と殺意を漲らせている樹と大勢の男子が映る。自然と頭の中に今までの人生が再生を始めた・・・

「って、走馬灯見てる場合じゃないよな」

無理やりアルを剥がし、最近自分の意志ではどうにもならないことが多いと、意味もなく天井を見上げた。

「ーったく、うざってえやつらだぜー」

俺は転校生と馬鹿どもの集団を見て溜め息をつく。あまりにもバカバカし過ぎる。そもそも、何故いきなり二人もうちのクラスになったのか疑問も持たねえのか。

そんなことを考えていると、見慣れたちっさい女が近づいてくる。

「トーヤは行かないの？みんな楽しそうだよ？」

「行くわきゃねえだろ、バカバカしい」

「トーヤ根暗く・・・ふぎやつ！」

「黙れ犬」

チョップで犬の頭を叩き、躰ける。

「ううく・・・」

犬は頭のとっぺんと額とを擦り、呻いている。どうやら先ほどの机に額を打ち付けたらしい。しかし、突然犬は呻くのをやめ大人しくなり、俯いた。

「・・・ねえトーヤ、あたしみっちゃんとは仲良くなれるかなあ？」
「・・・あきらめるくらいなら初めからすんな、普通の友達^{トモ}が欲しかったんだろ？」

朝のことがかなりショックだったらしい。だが、犬と高梨の朝の様子を見てる限り、かなり難しいだろうが、高梨も斎宮寺と宮守とは仲良く話せているから、望みはゼロじゃないはずだ。

「ありがと、トーヤ。・・・あたし、がんばる！」

「・・・ふん」

「・・・やっぱりトーヤは優しい、だから好き」

「勘違いすんな、辛気くせえ面でうろつかれたら迷惑なだけだ」

突然強く扉が開かれる音がする。音のしたほうを見ると、どうやら転校生に抱きつかれてた宮守が逃げ、馬鹿どもが宮守を追っていったらしい。

「・・・うぜえ」

俺はそう呟き、腕を組んで目を閉じた。

「なぜだろう、高校入学二日目にして明日から登校拒否したくなるなんて、絶対間違ってる」

今朝のホームルームの後、一時限目を無視して校舎内を逃げ回ったんだが生活指導の先生に捕まり、何故か俺だけ延々と怒られた。しかも怒られた際、「なぜこんなガキが・・・」 「俺はまだ彼女すら・・・」 など、明らかな私怨が混じり始め、一時間の説教のあと反省文を書くという説教フルコースを味わった。

「・・・ハア」

「どうかしたのか、ツバサ？」

「どうしたの、翼？」

そしてその元凶と美沙が校門前で俺の腕にしがみついている。下

校して行く生徒の視線が痛すぎる。

「ふたりとも離れてくれないかな、いい加減他の生徒の視線が痛すぎる。特に男子」

「「イヤ」」

何度目かわからないやりとりに再び溜め息をつき、少し離れたところにいる加賀見さんと樹に目を向ける。

「でさゝ沙耶ちゃんて転校する前はどこに居たの？」

「・・・・・・・・」

「えっと・・・」

先ほどから樹が必死に加賀見さんに話しかけてはいるが、加賀見さんはこれを完璧に無視、さすがの樹もこちらに助けを求めるような視線を送ってくる。が、こちらもなかなかきつい状況なので無視、またの名を現実逃避を始める。

「姉さん、早く来てくれ・・・つか助けてくださいー」

カッコ悪いが心の中で姉さんに助けを求める。そんな時、校舎のほうから上級生らしき大勢のグループがやってくる。そのうちの一人には見覚えがあった。そんな事を思ってるうちに、その集団は俺達五人を取り囲む。大体三十人くらいだろうか、その中の一人が前になる。

「よお、久しぶりだなあ宮守に斎宮寺、それに・・・高梨い」

いかにも不良です、と言わんばかりのだらしなく着てる制服に茶髪、それに無数のピアス。他の奴らも似たようなカッコをしている。

たしか・・・

「待ってたぜえ・・・この三年間どれだけ「美沙、樹、この人・・・覚えてる？」」

「「全然」」

「なんか見たことはあるんだけど・・・」

「そうなんだよね・・・でもこう、なんかあと一步で・・・」

「出てこない」

「そうなんだよね・・・」

俺らが喋るたびにナナシさん（仮称）の顔色が赤くなり、小刻みに震え始める。どこか調子が悪いのだろうか？

「その、調子が悪いのなら病院に行くといい、なかなかの腕を持っているぞ」

アルが俺にすりつきながら的外れなことを言う。俺らは何となくわかるからこそ、あえてわからないフリをしているのだが・・・

「舐めてんじゃねぞクソガキがぁ！」

ついに堪忍袋の緒が切れたらしい、いきなり俺に殴りかかって来た。

「短気なのはいけない・・・よっ」

「うおっ！」

樹が俺の前方に出現し、突っ込んできたナナシさん（仮称）に足払いをかけ、転がす。

「・・・こいつら殺していいのか、ツバサ？」

「ダメに決まってるでしょ、重症を負わせてもダメ」

「・・・了解」

「・・・加賀見さんも手伝ってくれるの？」

「・・・護衛と監視が任務だから」

突然目の前に立っている加賀見さんとのやり取りをしていると

「こんの・・・っ！やっちゃまえ！」

「うわぁ・・・古典的な三下のセリフだね・・・」

「叫んだ奴は私のだから」

樹と美沙がそう言い、加賀見さんとアルの四人で上級生の集団に突っ込んでいく。

「俺は行かなくてもいいよなぁ、これ・・・っと、そうもいかない・・・っか！」

俺は近寄って来た上級生の大ぶりのパンチを避け、逆に腕を掴み、殴って来た勢いを乗せた蹴りを腹部に叩き込む。上級生は呻きながら地面に倒れ伏せる。

「うおおおお！」

背後から怒声、振り返ってみると一人の上級生が鉄パイプらしきものを振りかぶり、俺に襲いかかってくる。このタイミングでは避けることも何かで受けることもできない！

「くっ！」

とつさに俺は覚悟を決め、直撃は避けようと両腕をクロスさせ、防御しようとする。

「やらせないよー！ー！ー！ー！」

叫び声とともに何かが背後から飛んでくる。何かはそのまま俺の横を通り過ぎ、綺麗にドロップキックを俺を襲おうとしていた先輩の腹部に叩き込む！

「ぐぼおっ！」

見事なドロップキックを叩きこまれた先輩はこれまた見事なくの字に体を折り曲げながら吹っ飛んでゆく。

中空で一回転し、俺に背を向け立ったのは小さな人、緩くウェーブの付いた長い栗色の髪を大きな黄色いリボンでポニーにしているようだ。よく見れば同じ高校の制服を着ている。助けてくれた彼女がこちらに振り返る。

「やっほー元気？ 危なかったねー怪我がなくてよかったー」

大きな目が特徴的な女の子で、俺に話しかけながらどこかせわしなく動く様はまるで小動物のような印象を与える。

「君確か朝・・・」

「そうだ！ 自己紹介してなかったあた・・・」
「うらあ！」

少女？ が俺に話しかけようとしたところで新たな先輩がこちらに向かってくる、が、先輩は急に立ち止り、そのまま声も上げずに崩れ落ちる。そして先輩の背後から新たな人影が出現する。

「ンなアホなこと今ここでしてんじゃねえよ、この駄犬が」

「イタッ！人の頭叩かないでよ……」

女の子の頭を叩きながら、こちらに近づいてくる新たに出てきた人物は、樹と同じかそれ以上の細身の身長、短髪の男の人で釣り目の特徴的な、どこかナイフみたいな印象を与える人物だった。この人も制服を着ている。

「つかくつちゃべってる暇あるんならさっさと助けに…….行かなくてもいいか、ありゃ」

アゴで指すほうを見ると

「……なんでなんだよ、なんなんだよお、おまえらあ！」

ナナシさん以外全員が呻きながら地に伏し、今にも泣きそうな感じで美沙に叫んでいた

「叫んだ意味がわからない、私は私、みんなはみんな、翼は私の」

「さらりと爆弾発言するね〜美沙〜」

美沙と樹がふざけあっていると、倒れている先輩の背に座っているアルが

「タカナシ、ツバサは私のだ、訂正しろ」

「違う、翼は私の」

「違う」

「違う、というより転校生のくせに生意気、引っ込みなさい」

「貴様より私のほうがツバサと長い間一緒に居たのだ、貴様のほう

こそ・・・」

あまりにもこの場にそぐわない話し合いに、他人のフリをして帰りたくなる。内心頭を抱えているとき、

「ずいぶん仲が良いのですねー翼ちゃん？詳しくお話していただけますか？」

背後から肩を白魚のような手に掴まれ、優しげな声をかけられる。しかし、俺には死刑執行官の執行合図、又は死神の呼び声に聞こえた。なぜそう聞こえたかというと

「姉さん痛いっ！肩が碎けるー！？」

肩を掴む力と、姉さんの纏う禍々しいオーラが原因だ。

「仲イイねー、あたしとトーヤみた・・・っい！」

「ふざけたことぬかすな」

「照れ隠しにゲンコツはちよつと・・・でもっ！トーヤのそんな愛のかたちも・・・んぎゃ！」

姉さんが俺に一方的に戯れを行ってる横で、どこかデジャブを感じるやり取りを横目で見える。その時、向こうで動きがあったらしい、繰り返す先輩が叫んでる。

「高梨、お前なんか・・・・・・・・お前なんか人殺しとAV女優のガ

キのくせに! ! !」

九（後書き）

十

「高梨、お前なんか・・・・・・・・お前なんか人殺しとAV女優のガキのくせに!!!!」

おいおいおい、なに言っちゃってるの？あの先輩。いくら僕だつて・・・・・・・・

「は、はは・・・・・・・・見た目可愛くてもこいつはなあっ！」

・・・・・・・・口開くなよ、それとも・・・・・・・・

本気でコロ・・・・・・・・

「見た目可愛くてもこいつはなあっ！・・・・・・・・グギャ！」

俺はナナシさんの悲鳴にハッとなり、怒りで真っ赤に染まっていた視界が色を取り戻していく。座り込んで右手で顔を抑えているナシさんが視界に入り、それと同時に拳からかなりの激痛、見ると何か白いのが刺さってる。よくみるとそれは先輩の歯で、それに気

づいて浮遊感にも似た怒りが収まっていき、怒りの感情が消えたわけではないが冷静さを取り戻す。

「子供は生まれて来る家を選べないんだよ、それを馬鹿にするためえのほう기가タねえクズだ。そもそも美沙の家のことを何も知らねえ癖にほざくなよ、ゴミが」

自分でも可能な限り睨みを利かせ、そう言い放つ。ナナシさんは立ち上がり俺を見据えるが、その目に宿る恐怖は消せていない。

「・・・森先輩」

ナナシさんを挟み、俺の正面に立つ美沙がナナシさんに話しかける。

「昔はそのせいでいじめられました。でも、今は二人の友達がいます。あなたがなんと言おうと、私は揺るがない」

「はっ！友達つつつても男だろ？どーせてめえの股ぐらで・・・」

「そんなことないもん！・・・あたしも、あたしも友達だもん！！！」

先ほど助けてくれた女の子がナナシさん（森先輩）と美沙の間に割って入る。

「みっちゃんが優しくくて温かい人だって、私知ってるもん！トーヤ以外あたしを無視してたのに、あたしに優しくしてくれた優しい人だもん！」

目に涙を浮かべ、小柄な体をいっぱいに使って女の子は美沙との思い出を語り始める

「あたしが転んだ時はハンカチ貸してくれたし、重い荷物運んでて落とした時、拾うの手伝ってそのまま一緒に運んでくれたもん！・・・いままで全然話したことなかったけど、友達だもん！友達になるもん！！」

耐えきれなくなったのか、瞳に浮かべていた涙をこぼし、訴えかけるように叫ぶ。美沙が震える女の子に近づき、後ろから頭を優しく撫でる。

「ふえ？」

「ありがとう、志木さん」

美沙はそれだけ言うと女の子の前に出てナナシさん（森先輩）を指差す

「私は私の為、けじめの為にあなたを殴り倒します。構えてください」

ナナシさん（森先輩）は右手で口元をぬぐい、それでも溢れる血を無視して

「さつきから人を無視してごちゃごちゃと・・・うるせえんだよお おおお！」

叫びながら美沙に襲いかかる。助走をつけ、渾身の一撃であろう右ストレートを放つ。美沙はそれを僅かに体をずらして避け、逆にナナシさん（森先輩）の右腕を掴み、姿勢を低くしながら相手の懐に入り込んで

「ハッ！」

背負い投げを放つ。

「ごふっ、がつ、あぁっ・・・」

肺から一気に空気が抜けた衝撃でナナシさん（森先輩）が悶える。
美沙はその様を見下ろしながら

「あなたには一つだけ感謝しています・・・あなたのおかげで樹と翼に会えました、ありがとうございます。二度と顔を見せないでください」

そう言い放った時、校舎のほうから教師が来るのが見えた。

「ありゃ・・・逃げよっか？」

「騒ぎが大きくなりすぎたようだな・・・ツバサ、早く行くぞ」

「わかってる・・・美沙、加賀見さんも行くよ」

「・・・了解」

「わかった・・・志木さん」

美沙は女の子のほうを向き、手を差し伸べ

「行こう？」

「・・・うん！」

女の子は美沙の手を握る。

「んじゃー全員でえ・・・エスケーロープ！！」

「一応私は副会長なんですけど・・・翼ちゃん、後で詳しくお話し

してくださいね？」

樹の叫びに合わせ俺らは駆け出す。一緒になって逃げながら姉さんが俺に話しかけてくる。その横で

「離せ犬！俺はカンケーねえだろ！？」

「イ、ヤーーーーーー！トーヤも来るのーーーーー！」

小柄な女の子がシャープな男にしがみついていた。

「まずはみんなで僕の家へ行きましょー！」

私立星稜桜花学園・・・ここを舞台にした俺らの非日常の二ページはこうして開かれた。

十（後書き）

十一(前書き)

十一

そよ風の当たる心地よい感触を感じながら顔を上げ、肌を焼く四月とは思えない灼熱の太陽の輝きに、手を翳しながら僕は瞳を細める。ふっ、と僕は波の音を、そう、さざ波の音を聞き、視線を正面に戻し・・・

「天国じゃーーーーー!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

もう真面目な振りするのムリ! だって目の前には春先にしては多い水着のお姉さま方、そして!

「ツバサ、私とうおーたーすらいだーに乗ろう!」

スレンダーなボディを黒い三角ビキニで包んじやったレヴィちゃん(アルフィミエルちゃんにそう呼べと言われた)に

「翼は私と一緒に泳ぐの」

同学年の中ではダントツじゃね? な実にけしからん我がままボディを白のホルダービキニとローライズで包んじやってる美沙。そして困り果てた表情をして二人に挟まれる我が友にして我が学年男子

のブラックリストトップランカー、翼。

僕はこの世の男子の心の声を代弁すべく、レヴィちゃんと美沙に腕を掴まれ、うらやましい妬ましい奴に殺意の一撃を加えようとしたところで背後から声上がる

「トーヤ、ね、ね、どう？あたしの水着？」

「ンな恰好で俺に張り付くな！・・・ってオイ、どこさわってやがる！？」

「あいたっ！・・・頭叩かないでよくただのスキンシップだよ・・・」

振り返れば、いつもはポニーにしている栗色の髪をおろし、チュートップとボーイズレッグのアンダーの水着を着た志木遥しきはるかことハルちゃんが、短髪に釣り目、無駄な肉のないシャープな体した戸塚とつか当夜とうやとじゃれつきながらこちらにくる。

「なぜ僕の周りにはこんなにモテるんだっ・・・！」

唇を噛みしめ、いつかのように理不尽な現実を見つめていると背後から

「あら、樹君どうしたの？顔色が悪いですよ？」

「・・・」

青いビキニに腰にカラフルな花の刺繍の施されたパレオを巻いた蒼さんと、スカートのようなフリルの付いたワンピースタイプのピンクの水着を着た沙耶ちゃんがこちらに歩いてくる。血は繋がっていないのに並んで歩くと姉妹に見える。

「いえ、蒼さん気にしないでください！自分は元気であります！」

「そう、それはよかった。それと今日は本当にありがとう、翼ちゃんたちだけじゃなく私の分までチケット頂いて・・・」

「気にしないでいいですよ！いつものことですし・・・言ってる目から汗が」

瞳の汗をぬぐう僕に、蒼さんは魅力的な微笑みを浮かべ

「ありがとうございます。そういえば沙耶ちゃん、お礼は言った？」
「・・・・・・・・言ってない」

いつもの無表情のまま、淡々と話す沙耶ちゃんに対して蒼さんは沙耶ちゃんの額を人差し指で軽く小突き

「人から何かしていただいたときは、ありがとうとお礼を言うのですよ」

目を瞬かせ、少し間があった後僕のほうを向き

「・・・・・・・・ありがと、樹」

「どーいたしましてー沙耶ちゃん、あとウチのお袋にも言ってあげなよー」

僕はそう言いながら、何気なく沙耶ちゃんの頭を撫でようと手を伸ばし

「・・・・・・・・触らないで」

「へっ？」

足から地面の感触が消え、一拍遅れて全身に感じる無重力感、視界いっぱいのスカイブルー！。

―ああ僕、今お空に居るのか―

現実逃避がてら、ちょっとメルヘンチックに僕が状況を理解した
ところで

だっば――――――――――

――――ん!!!!!!!!――

―なにやってんだ、あの馬鹿?―

アルと美沙に挟まれ、樹と話しながらも黒過ぎる殺気を送ってくる姉さんを見つめ、現実逃避しながら樹がプールサイドから投げ飛ばされ、水柱と共にプールの藻屑になっていくのを見つめる。

―なぜこんなことに・・・―

姉さんたち以外の殺意（主に男）をあたりから感じ、溜め息をつきながら開閉式で今は解放されている天井を見上げる。今日は天気が良い為、解放された天井から青空が見える。俺は青空を見つめながら今回ここへ来ることになった時のことを思い出した。

「私たちの新たな仲間加入を祝って親睦会を開きたいと思いまあゝす」

樹の家まで逃げてきた後、休みながら自己紹介やら世間話をしてる俺たちの前に突然、光の加減次第で銀色に見える黒銀のショートカットを靡かせ、中学生くらいの女の子、いや大人の女性^{……}が出現し、何かを握りしめたまま拳を上げ、独特のアクセントで高らかに

宣言する。

「私たちって母さんカンケーないし・・・そもそも親睦会って言い方が古くて・・・ぐぼおはあっ!!」

「なんとここには八枚の”星稜レジャーランド”のチケットがあるのでえゝ今度のお休みにみんなで行きたいのですがゝ良いですかあ？」

一瞬で樹を叩き伏せ、片足で顔を踏みつけた梓さんが翡翠色の視線をみんなに向ける。俺を含めた全員が翡翠色の視線の奥にある黒いモノを感じ、無言で首を縦に振る。

「よかったわゝそれじゃみんな今度の日曜、九時に私の家に集合よゝ水着も忘れずにねゝ」

梓さんの足から何とか逃れた樹が這いつくばりながら

「おっ、お母様、チケットが一枚足りないと思うのですが・・・」

「樹ちゃんは自分で手に入れてねゝ」

「あの、私の分はいいので樹君に・・・」

「蒼ちゃん、私からチケットが貰えないと言うんですかゝ？」

「ありがとうございます、是非連れてってください」

あまりの殺気に姉さんが即答で答え、それと同時に樹から表情が漂白されていく。

「それじゃみんなゝ日曜日にねゝ」

梓さんはそれだけ言い残し、部屋から出て行った。それと同時に部屋の空気が緩む。

「・・・ツバサ、先ほどの人間は誰だ？というより人間か？私も思わず頷いていたぞ」

左側から俺の首に手を回し、抱きついているアルがそう尋ねる。

「・・・あの人は梓さんといって、ああ見えても樹の母親だ」

「・・・いつ見ても理不尽、いろいろな意味で」

右腕にしがみ付いて離れない美沙の言葉に、俺は思わず苦笑する。確かにどこからどう見ても中学生にしか見えないのに、樹と美沙、それに俺の三人がかりでも指一本触れないぐらい強く、頭脳面でも完璧だったりする。

「ねえトーヤ、あの人・・・」

「黙ってろ、言いたいことはわかる。それにあーゆーのは考えたら負けだ。それよりも離れろ」

志木さんと戸塚君もなかなかに衝撃的だったらしい。

「そうだよ志木さん、あの人について真面目に考えたらダメだよ」

俺は戸塚君に押しのけられながらも首にしがみ付いて離れそうにない志木さんに声をかける

「うん、わかった！・・・そうだつばちゃん！あたしのことは遥って呼んで！」

「・・・なんで？」

「ミョージは家の名前だよ！あたしの名前は遥！ちゃんとあたし個人を呼んで！」

戸塚君から手を離し、勢いよく俺の目の前までやってくる。危機迫った視線に俺は

「・・・わかった、遥、これでいい？」

負けた。そのことに満足したのか遥は腰に手を当て、胸をそらし

「そう！さすがつばちゃん」

何か偉そうにそういう。それにしても”つばちゃん”で・・・まあ、やめてって言っても無理だろうけど

「宮守弟、俺も名前で呼べ。俺は家名で呼ばれんのは嫌いなんだよ」

再び首に飛びつく遥を払いのけながら、志木君がそう言う

「・・・わかった、でも戸塚君も俺のことは翼って呼んでよ。それならこっちも当夜って呼ぶよ」

「・・・チッ、わーったよ翼、これでいいだろ？」

俺から目線をそらしながら当夜君はそう言い放つ。俺はちよつと笑いながら

「改めてよろしく、当夜君」

「君はいらねえ」

「じゃ、よろしく、当夜」

そう言いながら俺は手を伸ばす。当夜は俺の手を握りながら

「恥ずかしい奴だな、ったく・・・」

そう言いながらも律儀に握手する当夜を見て、みんなで微笑む。
微笑ましい空気が辺りに満ちると

「・・・帰る」

「ああ、待ってよトーヤ〜!・・・みんなまた学校でね〜」

部屋から出ていく当夜を追いかけ、みんなに手を振りながら遙が
出て行く。どたばたと騒ぐ音が完全に途絶え、姉さんが

「かわいいですね、遙ちゃん」

「そうだね、ねえさん・・・っ!」

正面に座る姉さんにそう返すと、突然空気が重くなる。俺は思わず
体が強張り、動けなくなる。

「ところで・・・翼ちゃん、今日のことそろそろ教えてくれませんか?」

「ハア・・・」

俺は俯き溜め息をついた。姉さんの一言の後、アルと美沙なども加わってひと騒動あったのだが、思い出したくないので思い出さないでおく。

「ツバサっ!」

「翼っ!」

両手にしがみ付く二人と

「翼ちゃん? 離れましょうね?」

背後から近寄ってくる姉さんと沙耶。そして

「つばっちゃん大変そうだねートーヤ?」

「黙れ離れろ犬」

当夜と遙に囲まれ、最近こんなの多いなあ、と俺は再び天を仰い

だ。

プール施設の屋根の上に、二つの人影が翼たちを見下ろしていた。

「先ほどからこちらを見ているが、気付いたのだろうか？」

「いや、こちらの隠ぺい結界は完璧なはず、たまたまだろう。気づいたならもう少しまともなアクションがあるはずだ」

男の声の後、女の声が答える。

「・・・まあいい、今回は小手調べだが気を抜くなよ？」

「勿論、相手は最上位の来訪者・・・そんな愚かしいことはしない」

「では・・・行くぞ」

「了解」

二つの人影は屋根から消え、施設から響く喧騒が残った。

十二

「あらゝ蒼ちゃん、また大きくなったの？うらやましいわあ」

「ちよっ、梓さん！？どこ触って・・・あんっ」

「さややゝ見て見てゝ・・・デーモン閣下！」

「・・・・・・・・」

「また負けた・・・」

「もう終わるかミサ、だらしないなあ？」

「くっ・・・！」

女子グループが一塊りになりながらもそれぞれと戯れているのを、俺ら男子組はプールサイドで疲れた体を休めながら見つめていた。

「半永久機関ってのはちっちゃい子にしかないと思ってたよ・・・」

「

「奇遇だな、樹。俺もそう思ってたところだ・・・」

「ケッ・・・こんなことなら寝てりゃよかったぜ・・・」

一応誤解のないように言っておくと、男子がヘタれているわけではない。午前中から今この時、お昼過ぎまで遊び通していたのだ。一部おかしなモノがいるとはいえ、それとほぼ同じペースで遊び続けられる彼女たちのほうがおかしいのだ。・・・と、思いたい。

「そーいや翼」

「ん？」

右隣に座る樹から声をかけられる。口調はいつも通りだが、表情はどこか真剣さを帯びている。

「・・・手、大丈夫？」

「？」

「いや、先輩殴った時さ、ケツコー派手に怪我してなかったっけ？」

「ああ、あれね・・・」

確かに意外と派手に怪我はしたが、樹の家に向かいながらアルが怪しまれない程度に怪我を治してくれたため、すっかり忘れていた。

「見た目派手だったけど意外と怪我自体は小さくてさ、聞かれるまで忘れてたよ」

「そっか・・・あんがとね、翼」

俯き加減で妙にしおらしくそういう樹に思わず顔に血液が集まる。黙っていればどこかの神話から飛び出てきたお姫様のような容姿を持つため、男と分かっていてもこういう表情、仕草をされると心臓に悪い。

「オイオイ・・・何で俺にありがとうって言うのさ？」

少し目をそらし、右手で頬をかきながらそう言うと、樹は足を延ばして座っていたのを胡坐に座りなおし、正面で遊んでる女子グループを見つめながら

「いや・・・もしさ、もし翼が殴ってなかったら僕が本気で殴ってたからさ。ホラ、僕母さんからホントは喧嘩とかだめだって言われてるしさ・・・まあ、その、さあ・・・とにかく僕が言いたいのはあ」

そこで言葉を区切ると、俺のほうに視線を向け

「流石僕らの翼、ありがとう」

•
•
•
•
•
•

•
•
•
•
•
•

これまでの人生で一番魅力的な笑顔を見て、俺の左隣に座る当夜までが絶句する。たぶん見てないが俺と同じような表情をしているだろう。

「ん？どったの、顔真っ赤にして？」

「なんでもないよ・・・」

「ケツ・・・」

樹がかなり怪訝な表情をしているが、あえて無視する。かなり微妙な空気（樹を除く）になっているとき

「あらゝ男同士友情をふかめてるのゝ？ 私混ぜてゝ」

「どわあ！……って、梓さん何してるんですか！？」

「ん？ つばさちゃんに背後から抱きついてる」

いきなり顔の横から声が聞こえ、右肩に顎を置き、首にしがみつく形で背後から梓さんに抱きすくめられる。あまりにも唐突に梓さんが現れたため、樹も当夜も口をあけポカンとしている。

「はっ、アツっ 苦しい友情ごっ この後はこれかよ・・・」

当夜のそのセリフに、梓さんは当夜の左のほうに指差しながら

「拗ねないのゝ君にもお・・・」

「トッ、ウツ、ヤア――！！！！」

「・・・来ちゃったねえ」

遥がプールから上がり、一直線に当夜めがけて飛びかかり、あまりの勢いに当夜が倒れこみ頭を打つ。その様を梓さんは微笑みながら眺めていた。そしてすぐ立ち上がり、俺の正面に来て一回転し、何かポーズをとる。梓さんはそのポーズを保ちながら意味ありげな視線を俺に向けてくる。

「・・・そろそろ恥ずかしいんだけどなあ？」

「えっと・・・」

「年も考えずにそんなことするから・・・でえぐばおっ！」

言っではならない自爆呪文を唱え、樹は回し蹴りを顔面に食らい、上手くつま先に引っ掛けられてプールの方にバウンドしながら飛んでゆく。そしてそのままプールに突っ込み本日二本目の水柱を作る。あいつも懲りないなあ。

「・・・で、どうかなあ？私の水着？」

呼吸を整え、改めて俺にそう尋ねてくる梓さん。俺はその言葉を受け、梓さんを見つめる。梓さんは水着の上から下へ色が濃くなっていくワンピースタイプの水着を着ていて、一見すると控えめなデザインだが、背中側がおしりのすぐ上まで開いていて背中が丸見えであり、そのほかにもよくよく見て見るとかなり攻撃的なデザインだ。

「まだまだ若い子には負けてないわよね？」

「・・・」

確かに俺と同じ年の息子がいるとは思えないが・・・

「見た目が若すぎて色気皆無だあね……ンギャ！」

思っても決して口にはできないことを口にした復活したばかりの勇者に心の中で合掌。今度またコーヒーでも奢ってやろう。

「……でえ、どうかな？」

「……勿論似合ってますよ、とても俺と同世代の子供がいるとは思えないです」

一応の本音を告げると、梓さんは満足したらしく「ふふっ、ありがとう」と言っておこかへ行ってしまった。相変わらずいろいろすごい人だな、と思っていると後ろの騒がしい声で飛びかけた意識が引き戻される。

「トーヤと一緒に泳ごうよ」

「わーったから離れろ！ 恥ずかしいんだよっ！」

「ヤー……！ 離れたらトーヤ逃げるっ！」

「あ……っもう！」

……傍から見ると俺、こんなことになってたんだー

当夜と遙のやり取りを見て最近の自分の状況を思い出し、軽く凹む。

「オイッ、翼助けてくれっ！」

「……すまん、俺は飯でも食いに行く」

俺は回れ右し、後ろから聞こえる雑音を無視して歩き続けた。

「準備はいいか？」

「無論」

「では・・・」

俺はフードコートに向かう途中、姉さんとアルに声をかけられ、姉さんの提案でまだ復活しない樹以外で遅めの昼食を取ることになった。

「じゃあつばさちゃんとかくくん、お昼ご飯よろしくね？」
「・・・俺らが行くんですか？」

「当たり前でしょ？こーゆーのわあ、男の子の役目よ？」

「リョウカイシマシタ・・・当夜、行こうか？」

「今日はろくなことねえな畜生・・・」

梓さんに勝てるわけなのでそうそうに行動を開始する。席から移動する際、当夜が「オウ、てめえら何が良いんだよ」とメニユーのリクエストを忘れずに聞いていたのを見て感心する。

「・・・なんだよそのツラ、殴られてえのか？」

目が合ったらガンつけられた。おおコワ。

「・・・いや、早く行こうか。あの人たち気が長い方じゃないし、待たせたらどうなる事か」

俺は取り繕ってそう言うが、声色が優しいのは隠せない。当夜はその意味に気付いたのか

「・・・ツチ、早く行くぞ」

とだけ言って歩き出した。俺は当夜を怒らせまいと笑いをこらえてそのあとを追った。

「ツバサ、ちょっといいか？」

「ん、なに？ リクエストの変更なら今のうちだよ、あと少しで俺たちの番だから」

当夜と昼飯を買うため並んでいると、みんなで席を取ってるはずのアルがやって来た。アルは当夜の方を覗いながら

「ちょっと話したいことがあるんだが・・・トウヤ、すまないがツバサを借りてもいいか？」

「・・・早く終わらせろよ、オレ一人じゃ持ってけねえんだからよ」

当夜はそれだけ言う手と手で俺を追い払い、背を向け歩いて行くアルに着いて行く。

フードコートから少し離れた人気のあまりないところまでやってくると、アルはこちらに振り返り

「・・・実はツバサに二つほど言いたいことがあるんだ」

久しく見てなかったアルの真剣な表情に、思わず背筋が伸びる

「どうしたんだ、何かあったのか？」

「その、実は、な・・・」

アルらしくない歯切れの悪い言葉を呟きながら、これまたらしくなくモジモジと落ち着きがない。夢で会ってた頃でもこんなことは滅多になかった。

「・・・まさか風邪でも引いたの？ならみんなに言って先に帰らせてもらおうか？」

「いや、そうではなくてだな・・・」

心配してアルの顔を覗き込もうとする俺をかわし、深呼吸をしてアルは再び俺を見据えた。

「これをツバサにやろうと思ってな・・・受け取ってくれないか？」

そう言って右手を差し出してくる。その掌を見ると・・・

「ん？これ・・・ミサंगा？」

「そうだ、・・・受け取ってくれないか？頑張って作ってみたんだ」

感心してミサंगाを見つめる俺に、頬を赤らめアルはそう言う。

俺の答えは

「勿論もらうよ、ありがとうすごく嬉しい」

「そ、そうか！では待ってろ、私が付けてやろう」

アルは嬉しそうにそう言う俺の腕にミサंगाを付ける。ミサंगाはとても明るい赤色で、少し濡れたそれは輝いて見える。

「うわぁ・・・マジ綺麗だな、これ・・・。ホントありがと、アル。ところでもう一つは何？」

「ああ、それはだな・・・」

「！？」

「どうした、ツバサ！？」

突然の眩暈を感じ、立っていられずしゃがみ込む俺にアルが寄り添う。俺はそれに答えようとするが、地面が揺れているような感覚と、強烈な吐き気、頭痛に、そばに居るはずのアルの言葉すら聞こえなくなってくる。

「・・・！・・・・・・！！？」

耳鳴りのような甲高い音が響く中、僅かな力を振り絞ってアルの方を見ようとするが、視界が黒く染まり、それと同時に意識が途切れた。

十三

意識がはつきりするほど、身体感覚が歪んでいる様に感じられる。いつかは溶けていくような感じがしたが、今回は伸ばされては縮められるような、身体が膨張しては収縮し、歪に歪んで行くような感覚と、その感覚から引き起こされている背筋に氷の塊を流されたかのような怖気と吐き気。

足から揺れ歪むように、胎動するかのような動きが収まり出す頃、ようやく俺は辺りを見回す余裕が出来たてきた。俺はどうやらしゃがみ込んでいるらしい。自分の状況を理解する余裕が出てきたとはいえ、相変わらず全身に身体が歪むような感覚と、それに伴う怖気と吐き気は続いているが。

回復してきた思考がこのような状態になる前までのことを思い出し、俺は慌てて辺りを見回しアルを探す。頭を動かす際、頭の奥の方から心臓が脈動するかのような痛みを感じるが無視。しかし、探す必要もなくアルは俺の右隣で一緒にしゃがみ込んで俺の肩を抱いて支えてくれていた。

「・・・！・・・！！？」

アルの方を覗くと、かなり怖い顔をして何かを必死に呼びかけているようだが、残念ながら聴力は回復してないらしく、何を言っているのかわからない。さらに言えば瞳孔が開いているのだろうか？目の焦点が合っていないらしく、こんなに近くに顔があるというのに細かいところがぼやけている。

アルの無事が確認でき、安心すると同時に今までで一番ひどい頭痛が襲ってくる。

「・・・」

自分でも何を言っているのかはわからないが、アルを安心させようとにかく何か喋ろうとしたところで、俺の意識は再び闇へと堕ちた。

「しっかりするんだ！ツバサ！？聞こえないのか！？」

私はツバサ再び意識を失ったツバサを仰向けに横にし、冷たい上半身を抱えるように抱きながらツバサに呼びかける。

何故なんだ？ここ最近人が大切な話をしようとするたびに邪魔が入る。家ではアオイに邪魔され、学校ではミサに邪魔される。

しかも今回は空間隔離の術式でだ。たぶん指定した範囲内を異界として構築、対象をその空間内に閉じ込め、人工的に作った異界ごと相手を変質・変異させながら消滅させるタイプの術式だと思うのだが……

「これほど強大な術式はかなり高位の術者が何人も必要なはずなのだが……」

人一人で小規模とはいえ、一つの世界を作るような術は短時間とはいえ術者の生命すべてを魔力に変換してもまだ足りない。今は私が術式を解読し、ある程度の支配権を奪って構築・展開しているため安定しているが、本来ならば高位術者が三〜四十人は必要だろう。しかし、それほどの人数がこれほどの術を発動させるには、互いの魔力を共有するための術、又は術具、そして思考をリンクさせるための・・・など、必要な過程が多すぎる。家庭が多い分時間がかかり、何かで陽動でもされていない限り、私が気付かないはずがない。だが実際は全く私に気付かれないまま術を構築・展開、そして未だ完全には術の支配権を奪えていないこの状況。ということは・・・

「かなり高位の異形か・・・」

普段ならば鼻歌交じりに虐殺するのだが、ツバサに危害を加えたなら最高に、最大の苦痛を与えてやらねば気が済まない。

ツバサの顔色は真っ青で、小刻みに震える身体の体温はすごく低い。今はツバサの身体が第一の為、何が起こるか分からない今は離れられないが・・・

「さあ早く襲ってこい、すぐに見つけ出して苦しませてから殺してやる・・・っ！」

私はこの術式の解除と術者の居場所を突き止めるため、支配権を奪うべくこの空間そのものに干渉を始めた。

「ぐう・・・!?!?」

「どうした!?!?」

アル達がいる結界の外で男女の影が揺れ、男の方が苦しみ出す。

「対象が術式を解析しながら支配権を奪うのではなく、結界そのものに干渉、分解、再構築をし始めた」

「・・・でたらめだな。いくら高位の異形が対象とはいえ、普段ならかなりの痛手を与えられるはずなのだが・・・それすらなく、ましてや巻き込まれた人間をも助けるとは」

アルは最初、術式の論理を解説、現在結界を発動させている術式に自分で同じ術式を重ねながら相手の術式を破壊し、結界を維持したまま支配権を奪おうとしていたのだが、結界そのものを破壊し、出来た空白部分に無理やり自分の結界を繋ぎ合わせるやり方に切り替えてきた。

普通人が魔力を行使するとき、自らの精神体を使い”術式”を構築し、それに合わせて魔力を”形作る”。様は設計図を作ってからそれに合わせて物を作るようなもので、アルが今やってるのは出来ているものを破壊しながら無理矢理自分なりに”創り”繋げている。人間はおろか術の発動の仕方が人間とは違う異形のモノ達ですらこんなことはできない。

男は自らが構築した術式が破壊される度、自らを破壊されるような幻痛となってフィールドバック受けている。しかしその已を削るような痛みに耐え、内側から食い破ろうとするアル達を押しつぶす結界を維持し続けている。

「・・・結界の質を変え、私を結界内に入れてくれ。直接攻撃を仕掛ける」

女の影が男にそう提案するが、男の影からは戸惑いの色が滲む

「・・・ダメだ、危険すぎる。相手は無傷で尚且つ巻き込まれた人間を助けるほどの余裕があるんだぞ」

「何事にも初めてはあるさ、それにこのまま引き下がっては相手の力の片鱗すらわからん。我々は相手の力量を見るために来たのだから？」

女の言葉に男は近しい者でしかわからないくらい僅かに呻き

「・・・わかった、しかし私は並行して転移術式も構築しておく。
・危険だと思ったら無理矢理にでも離脱するからな」
「了解した」

男は女を結界内に入れるため、破壊されていない部分の術式を組み換え、同時に撤退するときの為の空間転移の術式を構築し始めた。

「・・・遅いね、翼達さあ、三人でなあにやってんのかね？」

僕は母さんの一撃から復活した後みんなと合流し、母さんが僕の分の昼食も翼に頼んでくれていたらしいので蒼さんたちと待ちながら翼達があまりにも遅いのでぼやいていると

「ねえ、アズにゃん・・・」

「大丈夫よ遙ちゃん、アルちゃんと一緒にだもの」

ハルちゃんが不安そうな表情で母さんと話していた。いったいどうしたんだろ？

「母さん、ハルちゃんどった・・・」

「犬、ちよつと顔貸せ」

僕が二人に話しかけようとしたとき、当夜が一人で切羽詰まった顔をして戻ってきた。彼から漂う空気は重苦しく、ただ事ではない何かがあったような感じが見て取れた。

当夜の様子を見たハルちゃんと母さんは一度目を合わせ、母さんがどこか緊張している表情のハルちゃんに微笑みながら頷くと、ハルちゃんは何かを決心したかのように真剣な表情を浮かべて静かに頷く。

「当夜君、ハルちゃん、お願いね？」

「任せて！」

「ケツ……。早くしろ、犬っコロ」

母さんに声をかけられた二人は連れ立ってどこかへ行ってしまった。

僕は得体の知れない不安に駆られ、母さんに声をかけようとしたとき、蒼さんと美沙の様子がおかしいことに気付いた。僕は母さんに話しかけるのをやめ、二人に声をかけようとする

「……。樹君、お昼ご飯の買い出しに行ったのって当夜君と誰が行ったんでしょうか？」

「……。樹、私も思い出せないの、誰と一緒に買いに行ったんだっけ？」

二人の言葉に思わず僕は絶句する。二人が翼を忘れるはずがない。だが、二人は嘘をついている様子はなく、それが僕に恐怖に近い感情を与える。

「先程樹君は三人で、と言っていました。私も何人で買いに行ったのかは覚えているのですが、誰と誰が買いに行ったのかが思い出せないんです……。そしてそのことがとても怖い、忘れてはいけない人を忘れているみたいで……」

両手で自分の体を指が食い込むほど強く抱き、震えながらそう語り出す蒼さんの言葉に、僕の恐怖に近い感情が背筋に氷の塊を突き入れられたような完全な恐怖に変わる。

今まで感じたことのない恐怖に僕は言葉が出てこない。口の中はカラカラで、渴いた喉がとても不快だ。いつの間にか掌には汗がび

っしよりと浮かび、まだ濡れている水着で拭おうと太もものあたりに手を伸ばすと、自分の足が震えていることに気付く。

美沙が顔を真っ青にして蒼さんと同じように自分の身体を抱いている様子が目に入るが、今の僕には美沙に声を掛けてあげる余裕はなかった。

「あなたをこーゆー一般常識から外れるような事柄から避けて育ててきたからねー。これが終わったらあ、ちょーっとだけ教えてあげるわあー」

母さんの言葉が頭に響き、身体ごと勢いよく母さんの方を向く。先程からあり得ないことばかり起きていて頭が混乱している。こんな状況下でも落ち着いていられる、さらにはあり得ないことをやった母さんにすら恐怖を感じる。

僕はさっき頭に響いたのは気のせいだ、と強く願っていると

「樹、翼ちゃんとアルちゃんが来たら全部教えてあげるわ。だからそんな顔しないで、いくら母さんでもそんな顔して見つめられたら傷つくわ」

真面目な顔をしてそう語る母さんの表情はどこか、あきらめにも似た色が浮かんでいた。しかしそれも一瞬のことで、母さんは辺りを見回して

「沙耶ちゃんも行ったのかー。・・・これはみんな早く戻ってこれそうねー」

そう微笑みながら言うのだった。

十三（後書き）

十四(前書き)

十四

「トーヤ早く早くっ、つばっちゃん死んじょうかもだよ!？」

「あの女がいりや多分問題ねえよ、それにてめえと違ってこっちは準備がいるんだよ。・・・犬、そのプールの手すり切り取ってこっちに寄越せ」

あまり周りの注目を集めないよう、出来るだけ静かに、且つ可能な限り早く人目の付かないところに移動しながら、遥は当夜の言葉に目を見開き、彼女にとっては普通の、周りから見たら大げさなりアクションを取って驚く。

「ええー!?!?アレ持ってこなかったのお!?!?イチオートーヤってプロでしょ、何やってるのさあ!?!?!?!?」

頬を膨らませ、再び大げさに見える遥の反応に、当夜は一瞬苦しそうに顔を歪め、すぐにいつもの表情に戻った後、タメ息をつきながら

「るせえ、俺は学生だ!・・・学生があんなモン持てられっかよ」

当夜が口にした言葉の最後の方、言葉とは裏腹に消え入りそうな声で紡いだ言葉の裏の意味を遥は読み取り、ハツとする。

遥は歩幅を緩め俯きながら

「トーヤごめん私・・・」

「・・・結界が固い、志木遥、戸塚当夜、手伝って」

遥が言葉を繋げようとしたとき、感情の一切がなく、平坦なアク

セントの言葉がそれを遮る。

二人が声に反応し、視線を同時にそちらへ向ける。視線の先には相変わらずの無表情を張り付けた水着姿の沙耶が立っていた。

沙耶は若干気まずそうな二人に構わずただ淡々と言葉を紡ぐ

「思ったよりも結界が固く、私じゃ突破できない。・・・志木遥、あなたなら突破出来るはず」

「てめえ、その口ぶりだと・・・」

「二人のことは知ってる、だからこうして協力を要請している」

沙耶の無機質で無自覚であろう言葉に遥が悲しそうな顔をするが、すぐに笑顔をつくり

「・・・わかった、うん！それじゃ早く行こう！二人を助けないとっ！」

当夜はそんな遥の様子を見て、思わず固めた拳を緩め、溜め息をつく。

「・・・協力するのはかまわねえが少し待て、今武器を作る」

「その必要はない、ワタシが貸す」

「貸すってお前・・・」

「説明は後、まずは人目の付かないところへ移動するのが優先。二人とも急いで」

困惑する当夜を沙耶は無視して遥に話しかける。そのまま三人は遥を先頭に移動し、見つけた作業員用の通路に入った。そして通路の初めの曲がり角を曲がったところで先頭を歩いてた遥が立ち止り、後ろの二人に向き直った後、目を閉じて薄い胸に右手を当て深呼吸をする。

深呼吸をした後、遙は胸に当てていた手を下し、久しく使っていなかった自らの影を、存在を広げるような感覚を呼び起こす。遙のその感覚に合わせて実際に遙の影が彼女の足元から放射状に通路の壁や天井にまで広がり、さらにはその影がまるで生者を地獄へ引き込もうとする亡者の手のように幾筋も影から浮かび上がる。

中空にまで広がっていった影の拡大が収まったところ、遙が今まで閉じていた眼を開く。明るい茶色の瞳は光り輝いて、黄金色のように見える。

「くっ・・・」

「チッ、相変わらずこれは・・・」

遙の影に徐々に飲まれていく二人は、今まで感じたことのない感触に思わず身震いをする。何度か体験したはずの当夜でさえどこか苦しそうな表情をしていて、いつも大抵のことには無表情を貫く沙耶にいたっては、人形のような無機質に感じられる端正な顔を歪ませている。

「それじゃ二人とも！　いっくよおー！？」

遙の叫びと共に二人の視界は闇に包まれた。

ギイイイン・・・カアアアアアン・・・

どっか遠くの方で雷が鳴ってんのか？そーゆーの遠雷って言った
っけか？

そんなどうでもいいことが頭をよぎる。たぶん今俺は半分現実逃避
しているんだろう。そんなことが出来るのはまだどこか余裕があ
る証拠だと思いたい。

俺はくだらないことを考えつつ身体を動かそうとするが、微かに
指先が動く程度であとは全く動かない。さらには眠くもないのに瞼
が異常に重く感じられ、周りの状況が分からない。それでも俺は早
く動けと足掻き続ける。

ー最近こんなんばっかだなオイ！ー

心の中でそう毒づきながら俺は自分の体へ動けと命令を送る。意
識が遠のく前の状況はかなりおかしかったような気がする。あの時
はかなり調子が悪く、その時も状況がよくはわからなかったが、再
び目を覚ましてみたら遠雷が鳴りやまない。前に意識があった時に
はアルが居た筈で、彼女の安否が気になる。

・・・ドオオオオオン！・・・ズガアアアアアン！

ーなんかまずくないか、これ？ー

アルのことに考えが及んだ時、急激に遠雷らしき音が大きくなっ

てきた。自分の周りには何か危険な感じがするが、未だに身体は指先が動く程度。いやな予感が胸に募っていく。

—とにかく動けよっ、俺の体！アルも無事でいろよ！—

俺は早く体が動かせるよう、とにかくもがき続けながらアルの無事を祈った。

白い影が疾風を纏い、迅雷の閃きがその疾風を纏った影からしゃがんで翼を抱えているアルフィミエルへ放たれる。それは普通の人なら掠っただけで肉どころか骨を軽く粉碎するであろう、黒い鋼鉄の長槍の形をした死。

「ふんっ、それがどうしたあ！？」

アルフィミエルは右の肩甲骨のあたりから生やした巨大な掌のようにも見える黒い奇形の翼で、金属的な音とともに火花を散らしな

がら突撃槍の一撃を受け、弾き返す。同時に、翼と同じ黒い鋼の鎧のような甲殻を纏った右腕を白い影に向け掲げ、帯電しながらその掌に創りだしたプラズマ球を撃ち出す！

ずどおおおおおおん！

直撃した場所は爆音と共に吹き飛び、その近くもプラズマの高熱によって溶けていた。さらには現実ではあり得ないことに空間にヒビまで入っていた。

「チッ！」

アルフィミエルは小型の台風のような白い影が巻き上がった砂塵から飛び出して来るのを見て、思わず舌打ちする。さらに自らの力が強すぎたために出来た空間のヒビを見て、苦々しい表情がさらに歪む。

「嘗て心の底から欲し、手に入れた力がこれほど忌々しいとは！――

力が強すぎるため、結界の壁を破壊しないように且つ、敵を殺しきる威力に上手く調節できない。アルフィミエル自身としてはこの結界ごと相手を殺したいのだが、力任せにこの結界を壊してしまっでは本来ここに存在はずの蒼達の世界にどんな影響があるのかわからない。彼女たちにもしものことがあっては翼が悲しむ、せめて格闘戦を挑めればよいのだが、ようやく動ける兆しを見せ始めた翼から離れるわけにはいかず、アルフィミエルはなかなか攻めきれずにいた。

「ふっ、その程度か！来訪者！？」
「くっ！」

力の調整に上手いかず、内心で毒づいているところもあった感じがするが、澄んだ女性の声と共に再度迅雷の速度で左方向、翼の頭を抱えて使えない左手側背後から突っ込んでくる。

左背後から心臓を貫こうとする一撃を左の肩甲骨から右側の掌のような奇形翼とは違い、関節の多い白い円月刀のような翼を生やし、それでいったん受け、その後すばやく翼の形自体を缺のような形の変え、長槍を固定しながらこちらへ引く。

突然受けるはずの激突の瞬間をずらされ、さらに引っ張られて体勢を崩した相手へ向け、左の円月刀のような翼の変形にあわせ、関節をすべて逆向きにした右の掌のような奇形翼を向け、手で言うところの指の部分を白い影を貫こうと伸ばす！

しかし、白い影は武器である長槍を手放し、伸ばされた五本の槍のような攻撃を風のように間をすり抜けかわし、流れるような華麗な動きでアルフィミエルから距離を取る。その様は華麗なダンスを見ているようで、舞踏会ならば間違いなく会場の注目を集めるだろう、戦いには不釣り合いな美しさと優雅さ。

「背後からいきなり襲ってくるような卑劣漢の割にはずいぶん華麗な動きをするな？その華麗さはここで披露するのがおいしい、私が地獄の舞踏会への片道切符をプレゼントしてやろう」

アルフィミエルはそう言いながら、右の翼の関節と伸ばした部分を戻し、左の翼で掴んだ長槍を砕いて右の翼と同じ形へ変形させた。襲って来た時から常に動き続けていた白い影が動きを止め、ようやくその姿が確認できた。

襲ってきた白い影は全身を白い西洋甲冑に身を包んでいて、先程聞こえてきた声から多分女性である、ということ以外わからない。あえて何かほかに言うなら女性にしては背が高いかもしれないが、それなりに距離があるために、確かなことはわからない。

その時、相手はおもむろに兜に手をかけ、それを外し投げ捨てる。そこから現れたのは緩くウェーブの付いた輝くような金の髪。金の輝きから覗いたのは瞳を閉じたどこか幼さの残る色白の端整な美貌。瞳を開いて現れるのは・・・魔力を帯びた翠緑玉の輝き。

幼さの残る美貌の女騎士は、肩ぐらいの長さの金髪を軽く手で梳き、アルフィミエルに対して笑みと言うには嘲りの色の濃い嗤い顔を向け

「貴様こそ、こんなところで私と踊るよりもサーカスに出た方がいいのではないかな？ 関節を瞬時に逆向きにしたり翼そのものの形を変化させる異形のモノなど、そうはいないぞ？」

そう言いながら右手に装飾のない無骨なロングソードを出現させつつ、左手で自分の首筋をなでる。よく見ると、その華奢で細い首にはうっすらとまるで切られたかのような真一文字の筋が浮かんでいる。

彼女は右手に握ったロングソードの切っ先をアルフィミエルに向け、両手で少し半身に構えた身体の横に構えつつ剣を視線の高さまで構える。

先程の軽口とは違い、構えを取った彼女から放たれる幾千幾万の鋭い針でこちらの全身を削るような殺気に、アルフィミエルは眼を細める。

「見世物になるつもりはなくてな、それに私は実は大人しいのだぞ？」

「両の翼に禍々しい魔力を集めながら言っても説得力がないぞ？」

三日月形に紅い口元を歪ませ、獰猛な笑みを浮かべながら女騎士はアルフィミエルにそう言い放つ。

実際、アルフィミエルは通常では考えられない量の魔力を翼へ集

めていた。アルフィミエル自身はそのことを隠すつもりはなく、あまりの魔力の密度によって両翼の周りの空間が陽炎のように揺らめいている。

「その量、密度、成るほど確かに過去最大級の来訪者らしいな、貴様は」

「・・・私のことを来訪者と呼んでいるようだが、来訪者とはなんだ？意味もわからずそう呼ばれても不快なんだが」

「来訪者とはこの世界とは別の場所、別の世界からやって来たモノ達の総称だ。この世界はいろいろなものが流れつく場所らしくてな、貴様のような輩も数多くやってくる」

「・・・それを問答無用で殺すわけか」

女騎士は量こそアルフィミエルに遠く及ばないが、それに匹敵するほどに自身の魔力の密度を上げる。

先程から話しながらも発し続けている殺気と合わせ、女騎士から発する波動だけで一般人なら気絶しそうな相手の波動を引き裂くように、アルフィミエルは女騎士を睨みつける。

そしてそれに合わせ、アルフィミエルの魔力が本人の意思ではなく、感情に反応して増大する。それを感じ取った女騎士は嘲りの表情を浮かべ

「当たり前だろう？わけのわからない危険なものを危なくない”かもしれない”、と言うだけで放置できるほど、人間は強くもない。実際、今貴様は魔力をコントロール出来ていないだろう？何かのきっかけでその身に宿る魔力を暴走させてみる、この国にいる人間くらいは軽々と消し去ってなお、あまりあるだろう」

相手の言葉にアルフィミエルの視線が一層鋭くなるが、表情には怒りに加え苦々しさが漂い始め、奥歯を強く噛締める。

その様子を見た女騎士は鼻で笑い、改めて自らのエモノを握りしめる。

「口数が多すぎたな、それでは死合いを・・・」

「ちよーととおまつたあー」

十五

遠い遠い昔、私は一人の暴君を殺した。一人で暴君の血に濡れた暴君の館に忍び込み、浴室に居た彼のその胸に短剣を突き立てた。彼に短剣のプレゼント直接渡した後、私はあっさりと彼の雇っている衛兵に捕まってしまった。そして私はそこから数日間牢に閉じ込められ・・・

「―――は以下の理由により、断頭の刑に処す！！！！！！
よ！最後に何か言い残すことはあるかっ！！！！？」

「なにもないわ。強いて言うなら・・・私は十万の罪もない人々の為に、喜んで一人の暴君を殺すわ。暴君が生まれ、人々を苦しめるたびにね」

私は笑みを浮かべながらそう言い放ち、涙を堪えてるらしい人々と、首の無い見慣れた体を見ながら、私の意識は闇に吞まれた。

「ちょーーーーーーとまったあーーーーーーーーーー！
?!?!?!?!」

「誰だ！？崩壊しかけてるとはいえあいつの結界を破って侵入してくる奴はっ?!?!?」

叫び声のした方に僅かに目を向けて見ると、ギリギリ視界に入るか入らないかの位置にある空間のヒビから黒い闇、というか影のような真っ黒なモノが放射状に広がっていく。

その黒いソレは三次元であるはずの空間に対して、視覚をどこかテレビ画面を見ているかのような二次元的に錯覚させながら広がっていき、直径が二メートルくらいの歪な円形になったところで侵食を停止した。

ソレが停止してから一拍間があった後、ソレの表面が水面のようにいくつもの波紋が浮かんでは広がっていき、そこから光る何かが浮かんでくる。そして次の瞬間

「チィ！」

光る何か――よく見て見ると剣や槍――が一般人ならば知覚できないであろう速度で私に飛んでくる。私はそれらを後方へ飛んで回避、宙に浮かんだ私へ来訪者が追撃で翼に集めていた魔力を開放、いくつもの黒い光の筋――レーザーのようなものを放ってくる。

普通ならば避けられない空中に居る相手への攻撃を、純粹な体術と魔力を纏わせたロングソードで回避、または叩き落とす。

私は無傷のまま着地、すぐさま未だに間断なく襲い来る攻撃へ対処しようとしたとき

「想定外のことが起こりすぎた、撤退するぞ――

――早すぎるっ！まだ私達の・・・っ！？」

「どうしたア！？急に足が止まってンぞ！？」

「くア・・・！？」

水着だけを着た短髪で細身の男が古代ローマの兵士が持っていたような黒い剣で切りかかってくる。グラディウス私は頭に響いてきた聞きなれた声に意識を取られ過ぎて対処が遅れ、相手の攻撃を防げたはいが吹き飛ばされてしまう。

「オラオラどおしたあ！？」

男の追撃、普段なら避けられる大ぶりの横薙ぎの一撃を私は体勢が不十分ながら、かろうじてロングソードで受ける、しかし

「ぐあ・・・！」

男のその細身、それも腕一本で振るわれたあり得ないほど重い一撃によって再び吹き飛び転がっていく。さらにその間にも剣や槍、

黒い光条が襲い来る。

切り傷や火傷をいくつも作りながらも致命傷を避け、何とか立ち上がる。素早く正面を見れば攻撃が止んでいたが、代わりに先程の男と水着を着た女の子二人がこちらへ歩いてくる。結界内の惨状には全く合わない水着を着た人物が五人も居ることと、自分の周りに発生し始めたモノを感じ、思わず微笑む。

「何笑ってるの！つばっちゃんとかーちゃんいじめたこと、許さないんだからね！？」

長いウェーブがついた栗色の髪を靡かせ、小学生のような女の子が前に出ながらそう私へ言い放つ。

「・・・許す許さないよりもまずは尋問」

長い黒髪が特徴的な小柄な女の子が先程の女の子の横へ並びながらそう言う。さらにその横へ肩に武器を担ぎながら細身の男がやってくる。

「こんだけいりゃ終わったら、諦めんだな」

担いだ剣でリズムカルに肩を叩きながら男はそう言うが、私は笑みを隠せない。

「・・・頭イカレっちゃったのか？焦ったり動揺したりとかそれなりの反応があんだろーがよォ？」

明らかに不利な状況でも笑っている私を見て、私の前に立つ三人が訝しげな表情を浮かべている。それはそうだろう、普通ならば彼が言っているような反応をするのが普通だろう。だが・・・

「私は頭がおかしくなったわけではないよ。・・・予想外に楽しい戦いが出来そうで嬉しいだけさ」

女の凄惨で獰猛な笑みを見て、俺は思わず息を飲む。状況は明らかに相手に不利、俺を含む三人が直ぐにでも相手を叩き伏せられる距離に居て、少し離れてしまったが後ろにはレヴィがいる。こんな状況にも関わらず笑みを浮かべることのできる相手を見て、背筋にいやな冷たさを感じる。犬と沙耶も同じらしく、僅かに身体が強張っているのが確認できた。

俺も右足を前に出し左足を半歩下げ、半身になりながら肩に担いでいたグラディウスを両手で身体の中央に構える。そのとき

「なァ!？」

「悔しいが今回はここまでだ・・・次こそは最後まで殺し合おう、来訪者」

苦々しい表情を浮かべながら、西洋鎧を着た女の姿が薄れていき、多分俺らではなく背後のレヴィに言いながらさらにその姿が薄れていく。

「逃がさない・・・！」

沙耶が自分の背丈よりも大きい大剣を担ぎながら、俺でも一瞬見失ってしまいそうな神速で相手に接近、薄れゆくその姿目掛け大剣を振り下ろす！

ーまた会おう、来訪者と子供たちよ・・・ー

沙耶の一撃は地面を割っただけで相手は消え、俺らの頭へ思念だけを残し消えてしまった。その途端

ーピシッー

そんな音が聞こえてきそうな錯覚を起こすほど、結界内にヒビが大量に発生する。

「チッ・・・犬っ！」

「りょーっかい！」

俺は急速に色を失いながら音もなく崩れていく結界から脱出する為、犬に向かって叫ぶ。犬も準備していたらしく、すぐさま俺は来た時と同じような不快感を感じながら視界は闇に包まれた。

十六

「ううん?・・・!?!」

現実のような幻想のような、ちょっと前まで当たり前だったすべてが鈍く感じる感覚を体中で感じながら俺は眼を覚ました。

初めボウ、としていた頭を振り無理矢理覚醒させ、この主を見つけ、話を聞かため辺りを見回す。

さっきまで必死こいて身体を動かそうとしながら最後、僅かに理解できたのは何人かが助けに来てくれたことと、その後すぐに僅かに見えていた光がまた暗闇に塗りつぶされ、それと同時に意識が再びなくなったことだけだ。

ーちくしょう・・・!!ー

力がなく、なににもできないとはいえ何度もただ周りに迷惑をかけ、なにもしないまま問題が片付き状況に流されることに俺は自分自身に対して怒りを覚え、思わず内心で自分を罵倒し、舌打ちをする。そんなことをしてもどうしようもないどころか、すでにすべてが終わっているのに。

しかし、最後あの後どうなったのか聞かないと、そう思い遠近感どころかともすれば上下左右すら分からなくなってしまうようなこの空間の主を探す。

普段なら俺を驚かすためか、いつも居る自分の背後を振り返るがそこには居らず、いつもの所にアルが居ないということに、俺は得体のしれない不安を感じつつさらに辺りを見回す。

だがアルは見つからず、焦りと不安が時間の経過とともに比例して俺の胸の内に募っていく。そこへ

「ツバサ・・・」

背後から聞きなれた声が俺の耳に届く。たったそれだけのことで俺の胸の内に募っていた暗い思いが晴れていく。

目の前に居るアルは最近の女子高生の姿（本人いわく「きゅーとだろ？そしてお前の隣にふさわしい姿だ」）で、俺から数歩も歩けば届くところに居るはずなのにこの遠近感もあやふやな空間のせいかな、幻のような、触れてしまうと溶けて消えてしまう雪のような儚さを感じる。表情もいつもの覇気を感じるものではなく、かなり妙な笑顔を顔に張り付けている。妙な、何かを諦め失ってしまった、そんな空虚さが漂うのを防ぐために笑顔を張り付けている、普段からアルをよく知っている俺には空いた穴に蓋をするためにくつつけた不格好な粘土細工にしか見えない。

そしてそう思いながら、勝手にアルが学校に入学して来たときのこと、中学の卒業式にされた告白について問い詰められたこと、契約の時のこと・・・出会った時のこと。今までのアルとの記憶が頭を過る。

俺は何故か頭に流れる思い出を感じながら背筋を伝ういやな予感に、辺りの気温が下がったような錯覚を感じる。・・・ここにはそもそも気温という概念がないのに。

ーそんな顔するなよ！それじゃまるでっ・・・！？ー

そう声を上げようとするのも思うように声が出ない。代わりに身体を動かそうとするも、石になったかのように動かない。

「私はな、ツバサ……。なんでも、封印さえ解ければ何でもできると思っていたよ」

口角を無理に上げ余計に不格好になった顔を、昏い、黒い想いで

縛られ動けない俺に向け、アルは言葉を紡いでゆく。

「しかし実際はどうだ？力が強くても何もできなかった……。寧ろ、私の力が強すぎるせいであのような敵まで引き寄せ、拳句ツバサに迷惑ばかりかけて敵を倒すこともできなかった……。私は自分がここまで役立たずで無能だとは思わなかったよ」

不格好な笑顔のまま、暗く陰鬱な空気を纏いながらアルは俺に背を向け、両手を回し、左足のつま先で足元を叩いてリズムを取り始めた。

俺は胸にモヤモヤと先程まで感じていた別離の予感とは別のキモチに戸惑う。なんと名付けていいかわからないこの気持ちと、アルに声を掛けたいのに掛けられない自分の不甲斐無さにもどかしさを覚え、奥歯を強く噛締め、両手を固く握りしめる。

アルは俺に背を向けたまま、再び自分の胸のうちのうちを語る。

「実は前から思っていたのだ……。封印が解け、いざツバサの為に何かしようとしても私の力は何の意味もなく何もなさず、か弱いアオイやミサ、イツキ達の方がツバサに笑顔を与えていた、支えていた……。私はツバサのそばに居なくても、イヤ、寧ろ居ない方が良いのかも知れないな」

そう言っただけ俺の方に向き直ったアルは今にも碎けて消えてしまいそうなほど儚くて……。

その表情を見て先程までの胸の内に燦っていた想いは消え、代わりにはつきりと寂しさと悲しさが募り、その思いが今度こそ俺を動かす。

「ふざけんな！今まで俺を振り回しておいて、俺に何もせずに消えるとか馬鹿げてんだろっ！？今まで迷惑かけた分、ちゃんとなんか

返せ!!」

激情に突き動かされ、自分でもよくわからないことを言いながら俺はアルに掴み掛ろうと踏み出すが、その直前にまるで氷が砕けるように足元が砕け落ちていく。とっさに足元を見ると空間がひび割れ、割れて破片になったところから昏く深い穴に落ちていく。しかし、俺は現実ではあり得ないことに足元が消えてもすぐには落下せず、緩やかに足元に出来た穴に呑みこまれていく。完全に中空に浮かんだ状態で、何とか淵に手を伸ばそうとするがすでに遠く、寧ろ無重力空間に居るかのように体勢を崩すだけだった。

「・・・ツバサは優しいからな、そんなことを言ってくれると思っていた。だからこそ、そんな優しいお前を巻き込みたくない・・・。でも安心してくれ、じやまな奴らを片付けられずと見守っているよ」

いつの間にか俺の目の前にアルは移動し、潤んだ瞳を俺に向けそう言う。そのままゆっくりと落下する俺に近づき、白い高級な陶器のようなアルの両手が俺の頬に触れ

「ん・・・。」

「アルっ・・・。」

唇に触れる優しい温度、一瞬なのか長い間触れていたのかわからなくなつて、この温もりを離したくないと思った時、頬に触れていた両手が俺の胸をそつと押す。俺は魔法にかかった様に動けなかった。動けない俺を見るアルの表情はさっきまでの不格好な笑顔ではなく、すっきりとした、とても綺麗な笑顔を浮かべていた。その笑顔はあまりにも綺麗すぎて怖くなるほどだった。

「ずっと見守っているからな……。ツバサ……。」

「ずっといっしょに居るから……。見守っているから泣かないで、翼ちゃん……。」

紅く朱く塗りつぶされた自分の中の忌まわしい記憶、それが今のアルと重なって見える。

「お前も俺の目の前から消えるのかよっ！—

しかし、俺の思いは何かのカタチになる前に、身体が重力を思い

出したかのように昏い穴へ堕ちていき、意識も闇へと消えた。

「行くな、アルっ！」

俺は叫びながら前に右手を伸ばす。しかし、手は虚空を掴み、視線の先には見慣れた天井。仰向けに寝ていた状態を起こし、改めて周りを見回して先程までの激情はなくなり、代わりに胸に空虚感が漂う。

「ん……。」

枕元のあたりで人の気配を感じ、そちらに視線を向けて見ると姉さんが俺のベットに突っ伏して寝ていた。多分、姉さんのことだから俺が目覚めるまで一緒に居るつもりだったんだろう。

姉さんは身じろぎをした後、眠たそうに瞼をこすり、俺にまだ焦点が合っていないであろう視線を向ける。俺はその仕草に少し胸が温まり、笑みを浮かべる。

「翼ちゃん……。？翼ちゃん！大丈夫なの！？どこかおかしいところとかないっ！？」

姉さんは俺が起きているのを認識すると、捲し立てる様に言葉を並べながら俺に縋りつく。俺はそんな姉さんになるべく優しい笑顔を向ける。

「俺は大丈夫、それよりもみんなは？」

「皆は大丈夫だけど……。」

「アルが居なくなった？」

顔を伏せ、言いづらそうにしてる姉さんの言葉に俺が繋げると、姉さんは驚いた表情を浮かべ俺を見つめる。そして何かを言おうとして口を開きかけ、結局唇を閉ざすという行為を数度繰り返す。多分寝起きということと、何から尋ねようかまだ頭の中で整理がついてないのだろう。ようやく何を尋ねるかを決めたのか、姉さんは一

度顔を伏せてから再び俺を見るとその紅い形の良い唇を開く。その顔には戸惑いと、多分恐怖、怖れが張り付いていた。

「・・・翼ちゃんは、アルちゃんのこと、全部知ってたんですか？
あんな・・・。あんな、非日常的なことを、知っていたの、ですか・
・・・？」

俺はその姉さんの途切れ途切れの言葉に頷くと、どこからどう説明しようか考え始めた。

十七(前書き)

十七

閑静な住宅地に居を構える齋宮寺邸、そこは純和風の大きな屋敷で、樹は敷地内にある一人で居るには大きすぎる離れを自分の部屋にしている。

翼が目を覚まし蒼に説明を始めたころ、樹の部屋では美沙や当夜達残りのメンバーが集まっていた。

「・・・と、ゆくわけです。わかった、樹ちゃん？」

「・・・とりあえず、自分が真つ当な人間の家系ではないことはわかったよ」

純和風のつくりの部屋で、樹たちは大きな木製のテーブルを梓から見て、その右隣に美沙、正面に樹、左側に当夜と遥の順で囲み、齋宮寺家の血筋についての秘密を梓から聞いていた。

それは一般の人からすればSF小説などの中の話で、それを語る梓の頭の正気を疑う内容だった。しかし・・・。

「じゃないと記憶が無くならないのがおかしいの、かなあ・・・？ たまたまとか、そーゆー可能性はないのでしょうか、お母様？」

とてもではないが梓の”齋宮寺家の人間は厳密には人間とは異なる”という話は信じられず、樹はわざとふざけて再度梓に尋ねる。だが、梓は苦み走った笑みを浮かべ、頭を横に振る。そして、とても言いにくそうに小さな口から言葉を編む。

「それはないわあ、もし樹ちゃんが突然変異的にちょー高位魔術師の素養があったとしてもお、あれほど大規模かつ高位術式は魔術的な防壁を展開してなきゃ防げないわ」

「・・・それじゃやっぱり？」

「・・・てめえの家系もこっち側ってことだよ」

樹は突然声のした右側の方を向くと、胡坐で腕を組んでこちらを見ずに眼を閉じている当夜が居た。当夜が先ほど言った言葉にはいつもの不機嫌で鋭利な印象が無く、代わりに笑って流せないモノが見え隠れしていて、樹は落ち着かない気持ちと共にどこか虚しい気持ちを感じる。

当夜はその瞳を閉じたまま、樹とつての非現実的な、非日常的なことを語り始める。

「鬼、悪魔、妖怪・・・。今じゃ異形のモノなんて呼ばれてる奴らはなあ、自ら望みでもない限り、自らを侵すものは無効化されんだよ。RPGなんかである毒とか麻痺とかかな。下位の異形には幻覚なんかは効くかもしれないが、記憶操作なんかは雑魚にすら無意味なんだよ」

当夜はそこまで言うと言葉に疲れたのか、それとも別のことになのか、彼にしては珍しい俯きながら大きな溜め息を吐いてから天井を仰ぎ、頭が先ほどの位置に戻ると彼の瞳は開かれ、気迫のこもった眼で樹を見据えていた。

樹は初めて見る当夜の気迫のこもった視線に、思わず身体が硬直する。樹は僅かに俯き、静かに深く、ゆっくりと息を吐くと、当夜と彼の隣に座る遙を見て

「僕にもその血が流れてるから何ともなかったって？当夜も遙もなかったよね？それにこっち側ってどういうこと？」

ふざけた抑揚をつけた話し方ではなく、いたって真面目に、そして芯の強さを感じさせる声で樹は同類らしき二人に尋ねる。

遥はその言葉に唇を噛みしめ、眼を伏せるが当夜が優しくその頭に手を置く。そして・・・

「そーだよ・・・。俺と犬は、俺らの家系は方法は違ってもバケモンの血が流れてる、それも色濃く」

樹はこの部屋が二度目の時間が凍結するのを感じる。当夜の言葉に頭が真っ白になる。当夜と遥の記憶が変わらなかったのが”異形の血”のなせるものだとしたら・・・

「・・・ねえ、樹ちゃん？お父さんのこと覚えてる？」
「・・・唐突に何さ？」

梓の言葉に、樹は何も考えられない頭で何とかそれだけ返すと、梓は目の前にあるお茶を一口飲み、湯呑みを手に持ちながら伏し目がちに次の言葉を吐き出す。

「世代を重ねるうち異形の血が薄くなって、ただ人より感が良いとか、俗に言う靈感が強いだけって人は意外と居るわ。日本は島国だから大陸の人から見たら血は濃いでしょけど……。でもね、樹ちゃん。あなたにそれはあり得ないわ」

梓は湯呑みをテーブルに置くと、正面に居る我が子に真面目で深刻そうな声色で

「あなたは……。薄くなった斎宮寺家の異形の血を濃くするため、”祖神”……。私と、この家、この家系が封じた異形との間に産んだ子供なんだから」

「・・・で、翼ちゃんはどうしたいんですか？」

細かいところをぼかしながら俺が姉さんにアルとの記憶、思い出を語ると、姉さんは俺の右手の指先に触れながら、俯いてそう俺に尋ねる。

俺は姉さんから視線を外し、天井を見上げたまま

「アルを探し出す。・・・見つけてどうしたいのか自分でも分からないけど、とにかく見つけ出す。話はそれから、かな・・・？」

―ああ、やっぱりそう言うのね・・・。翼ちゃん・・・―

蒼は優しい翼の言葉に嬉しさと、それ以上の恐怖が胸の中に渦巻くを感じる。

この子は普段無表情でよくわからないが、心の中はだれよりも強くて熱い激情が渦巻いているのを、私はよく知っている。

私がこれから言うことを、翼ちゃんは聞いてはくれないだろう。でも、姉として、一人の女の子として言わずにはいられなかった。

「翼ちゃん……。なんでもします、私何でもするから……。アルちゃんのことは諦めて」

私の言葉にどんな顔をするのか、見るのが怖くて俯いたまま私は翼ちゃんにそう言う。そのまま翼ちゃんの反応を待つが、静寂が部屋を支配するだけで、私は翼ちゃんを失うかもしれないという恐怖から逃げるように、いや、逃げるために喋り出した。

「翼ちゃんは知らないかもしれませんが、翼ちゃんが消えた時、私は翼ちゃんのことを思い出せなくなっただんですよ？……。わかりますか？好きな人を、愛する人を思い出せない、忘れていくときの喪失感と恐怖を？私はもう二度と家族を、愛する人を失いたくありません。アルちゃんはきっと大丈夫ですよ、それに全部終わったら戻ってきます……。私は何よりも、誰よりもあなたが大切なんです。それこそ世界中のすべてを敵にしてもいいくらいに。だからもう、危険なことはやめてください……。お願い……。」

あまりにも自分勝手に醜い言い分と、自分でも何を言っているのか分からなくなり、最後の方は涙交じりになってしまった。それも両手で顔を覆いながら言った為、翼ちゃんにはよく聞こえなかったかもしれない。

「うつ、うつ……。えっ、つばさ、ちゃん……。？」

愛する人は優しく私の頭を撫で、顔を上げたところで優しく涙を指で拭ってくれた。涙と驚きで上手く声が出せない私に、愛しい人は優しい笑みを浮かべて私を見つめてくれる。

「ありがとう、心配してくれて……。でもごめん、俺はアルを探すよ。俺も誰かが居なくなるのが嫌なんだ、危険なのはわかってる。いや、分かってないかもしれないけど……。俺はアルを探すよ」

「翼ちゃん……。そこまで……。――」

自分でも分かっていた翼ちゃんの返事に、どこか納得しつつ、恐怖と醜い嫉妬が私の心を縛る。しかし……

「分かりました……。翼ちゃん、一つだけ約束してください」
「何？」

私はベッドに腰掛け、翼ちゃんの右手を両手で握り、お互いの鼻先がぶつかりそうなほど近づいて

「一つ、私も手伝います。嫌とは言わせません。そして……。必ずアルちゃんと無事に帰ってきて、沙耶ちゃんも入れた家族みんなでご飯を食べること」

「……。もちろん、必ず守るよ。ただやっぱり、姉さんまで手伝う

のは・・・」

「だあゝめ、翼ちゃんもわたしの言うこと聞いてくれませんか、私も翼ちゃんの言うこと聞きません」

わざと拗ねた風にそう言って顔を背けると、翼ちゃんは苦笑しながら

「わかったよ、姉さん……。いっしょにアルを探そう、そしてみんなでご飯を食べよう。……。親父も入れてね」

茶目っ気たっぷりに最後の言葉を言う翼ちゃんに、私は、この子ならやってくれる、と確証もなく絶対の自信を得た。

「息子も成長したもんだ、女の為に身体を張るとは、もう一人前だな」

翼の様子を見に来た翔慈は、中で真剣な話をしているのを感じ、廊下で二人の様子を覗っていた。途中から立ち聞きしていたため、詳細は分からないが

「美空、見ているか？俺らの息子は、いっちょまえに男になったぞ」

息子の成長ぶりに、嬉しさと少しの寂しさを感じつつ、翔慈は翼の部屋から離れる。

「さて、あいつら前に進むってんなら、帰ってくる場所を作るのは大人の役目だよなあ？」

嬉しそうに、楽しそうに自分と空から見てるであろう妻に心でつぶやくと、翔慈は眼を覚ました翼の為の食事を作りに台所へと向かった。

十八（前書き）

お久しぶりです。・・・ホントに申し訳ない、なかなか忙しくて・・・。これからも忙しいのですが、がんばってUPしていきたいです。書き方は久々すぎてかなり違うかも（汗

十八

暗く昏い闇の中、無機質で作り物めいた美貌の少女が眼を閉じ、その美貌を歪ませ佇んでいた。両サイドの一部が長い特徴的なショートヘアを揺らし、腕を組んで佇む姿は、まるで神話の中の一幕のようだが、彼女の周りには人どころか生き物、異形の気配すらない。少女は今、自分がかつていた真っ白い空間に漂い、これから自分のなすべきことについて考えていた。

「……奴らを潰す、それ自体は容易い……。しかし何故……」

「……少女はすでに己のすること、すると決めたことはもうすでに頭の中にはある。だが少女は動かない。」

「……寂しい……。一人ですると決めたのにっ……。！」

自分の思い人の少年と別れた時の決心は今胸に無く、代わりに少女の胸を埋めるのは寂しさばかりだった。

彼が生まれた時から共に過ごし、今まで自分からほとんど離れた時が無かったが、いざ離れてしまうとその存在が余りにも大きいことを知ってしまった。いや、再確認をしたと言った方が良いかもしれない。

だからといって彼のところには戻ることは出来ないし、彼がそばにいないければこの胸に渦巻く寂しさが埋まることもない。

少女、アルはその胸に何かを抱くように丸くなり、宙を漂い始め

た。上も下も無いこの空間で。

― 負けるな私っ、私は決めた筈だ！決めた・・・はずなんだ・・・！
―

真っ白な何も無い虚無の中で、美しい少女はただただ透明な雫を流し続けた。

十八（後書き）

申し訳ない、短いですがリハビリということで許してください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1665i/>

禁忌と非日常

2011年2月14日18時13分発行